教科書文庫
4
810
41-1930
2000054741

中學
國文教科書

六卷

41811
教科書文庫
4
810
41-1930
20000
54741

教科書文庫
4
810
41-1930
2000054741

文部省檢定濟
昭和五年一月廿一日　中學校國語科教科用

吉田彌平編

中學國文教科書

卷六

東京　光風館藏版

広島大学図書
2000054741

資料室
375.9
Y019
apn
apneg

ノルアム城（ターナー筆）

広島大学
蔵
54741
図書

中學

國文教科書 卷六

目次

一 天の愛子……德富健次郎 一
二 自然の愛……藤岡作太郎 四
三 畸人一茶……本山荻舟 一〇
四 松江の曉……小泉八雲 二四
五 たき火……國木田獨歩 三一
六 空行く雁……〔曾我物語〕 四三
七 曾我兄弟……森林太郎 四六

八　天つ星……六七
九　見知らぬ國……鶴見祐輔　七二
一〇　萬里の長城……土井晚翠　七七
一一　佐那田餘一……〔源平盛衰記〕　八〇
一二　佐藤嗣信……〔平家物語〕　九一
一三　忘れ難き日……姉崎嘲風　九八
一四　友に寄す……高山樗牛　一〇二
一五　愛兒の死……西田幾多郎　一〇九
一六　鹽原……尾崎紅葉　一二〇
一七　霧のロンドン……夏目漱石　一二七
一八　吉野の宮……北畠親房　一三三

一九　如意輪堂……〔太平記〕　一三八
二〇　月の夜さむ……〔新葉和歌集〕　一四三
二一　煤はらひ……一四七
二二　雪前雪後……幸田露伴　一四八
二三　仁和寺の法師……〔徒然草〕　一五四
二四　僧正と賊……廣津和郎　一五七
二五　故郷の花……〔源平盛衰記〕　一七五
二六　小枝の笛……〔平家物語〕　一七九
二七　世界の歌枕……上田敏　一八四
二八　隅田川の水よ……島崎藤村　一九五

目次終

中學國文教科書　卷六

一　天の愛子

徳富健次郎
號は蘆花
文學者
熊本縣葦北郡水俣町生
昭和二年歿
年六十

一

日本に生れたことを感謝する。そらおそろしくも思ふ。

どう思ひ直しても、うぬ惚ではなかつた、事實である。日本は皇天の祕藏子だ。

世界の地理・歷史から日本の地理・歷史に還つて見れば見るほど、私は天の意匠の指痕を鮮かに讀む。世界の爲に日本を育つべく、天はどれほど面倒を見たことか。父の嚴、母の慈、あらゆる手

を盡して、日本は今日の今日まで育てられた。勿體ない大御親の心盡しに、私は感激せずに居られぬ。否でも應でも、日本は天の愛子だ。

二

世界の地圖に見る日本の小さゝよ。小さいが當然。種子は小さい。核は小さい。要は小さい。私は曾て歌つた。

日輪は見る目に小なれど、光世界を照し、
日本は地圖に小なれど、志四海を懷く。

世界の何處に「日」を旗章にする國があるか。自ら日本と名のつた時に、「日」を旗章と定めた日に、日本の使命と天職とは定まつてゐた。

三

知識を世界に
知識ヲ世界ニ求メ大ニ皇基ヲ振起スヘシ（五條の御誓文の一節）

阿蘇
熊本縣阿蘇郡に峙つ活火山

淺間
長野・群馬兩縣に跨る活火山

世間見ずであつてはならない。だから明治維新の初、大いに「知識を世界に求め」たのだ。私は日本の貧しさを知つて居る。古今・東西あらゆる優秀なものが日本になくて、他の兄弟の國にある。愛によつて私はそれをわが有にした。又、しようとしてゐる。愛する者はすべてを有つ。

徳富健次郎

私は日本人の病を知つてゐる。日本人たる私は、うんざりするほど其の病を持つてゐる。併し、私は失望せぬ。私を支配するものは瑞々しい生命だ。私の衷に火が燃える。曾て富士を一夜に聳えさせ、今も阿蘇・淺間を煙らせる火、恆に新な創造の火、それが私の衷に燃える。私が身ぶるひして

起つ時、凡百の病は日の前の夜の如く逃れる。

私は日本の若さを知る。私は若い。きまりが悪いほど若く幼い。二千數百年の歴史を脱ぎ、明治維新に生れかへつてから、やつと半世紀過ぎたばかりだ。若いが當然だ。若いが生命だ。生命は生長する。私は日本の前途を信ずる。

四

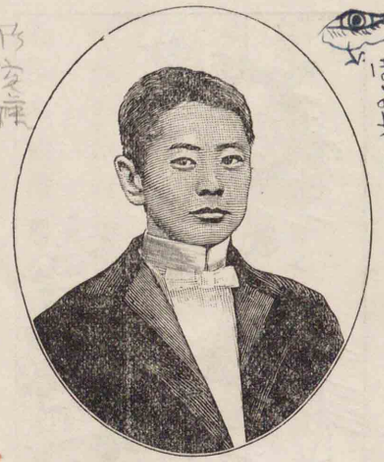
應ずる者への豫言。着く者のための座。負ふ者の使命。自覺だ。私は最早逃げも隱れもせぬ。日本を將ゐていさぎよく定められた天の愛子の座に着く。（太平洋を中にして）

藤岡作太郎
國文學者
文學博士
東京帝國大學文科大學助教授
石川縣金澤市生
明治四十三年歿
年四十一

二　自然の愛

藤岡作太郎

慈愛なる母の懷に養はれたる子は生涯その恩愛を忘れず。日本の風土は國民の慈母なり。地味豐饒にして、河海に魚貝の利多く、生活をして自由ならしむるが上に、優美溫雅なる山川は常に臉上に愛を湛ふるが如し。接する者はこれに親しみ、親しむ者はこれを慕ふ。愛に迎へらるる者は愛を酬いざるを得ず。天然の大公園に棲む我が國民がその一木一草を懷かしむは自然の情なるべし。都會の緣日に張りたる夜店には食品・玩具などの多かる中に、露を帶びたる植木の葉の翠、花の紅こそカンテラの光に映えてみづ〳〵しく鮮かなるを、中流以下の市民はあれこれと買求めて座敷に飾り、庭に植込む。裏長屋の道具の据所もな



藤岡作太郎

カンテラ
蘭語の「燭臺」の訛
Candelaar

き窓前にも稗蒔作りて田舍の景色の面影を偲び、破れ鉢に唐芋を育てゝやさしき野趣を嬉しむ。長火鉢の脇の福壽草は鏡餅に對して暖かげに、軒端に吊りたる忍草は風鈴の音と共に涼し。上下貴賤を通じて自然を愛好すること此の如きは、他の國民にその匹ありや。我が國民は母の慈愛をのみ受けて父の威嚴を知らず。自然の愛すべきを見て、畏るべきを思はず。野をも垣をも吹亂す二百十日の風も、野分の名にやさしく、峰も谷も一つに埋みてすさまじき冬の山里も、深雪といへばみやびやかなり。「恐しき猪もふすゐの床と稱ふるに

稗蒔忍草

恐しき猪も
和歌こそなほをかしきものなれ
あやしのしづ山がつのしわざも
いひいづれば面白くおそろしき
ゐのしゝもふすゐの床といへば
やさしくなりぬ
（徒然草）

やさしく聞ゆ。」など、兼好がいへるは、我等が自然に對する此の傾向を說明せるなり。雨といへば照りつゞきたる夏などは嬉しけれど、一日の降も十日の照より飽きくするに、卯の花くたし・時雨など、何れも趣ありて感ぜらる。

自然の愛はかくして表はるゝのみならず、その名を借りて屢〻人事に用ふ。文學には源氏物語の卷の名に夕顏・末摘花・葵・榊・朝顏・胡蝶・螢・常夏・藤袴・若菜・柏木・鈴蟲・紅梅等あり。菓子に鶯餅・櫻餅・柏餅・萩の餅・紅梅燒・時雨など枚擧するに遑あらず。今の刻煙草の名にも福壽草・白梅・皐月・あやめ・萩・紅葉等あり。古く獸肉を紅葉といひ、金貨を山吹に譬へたるもやさしからずや。

我が國民は自然を愛賞する餘り、又よくこれを尊重せり。尊重するものには悅んで服從す。彼等はみだりに人工の手を加へ

兼好
吉田氏
鎌倉室町時代の文學者
正平五年（一三一〇）寂
年六十九

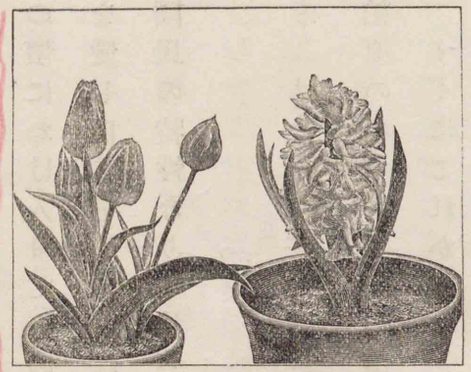
ずして、自然のまゝに自然を仰ぐ。此の服從を以て屈伏といふなかれ。悅服は自動的なり、屈伏は他動的なり。屈伏するものは不平なる奴隷が氣儘なる主人に對するが如く、悅服するものは從順なる兒孫が寬大なる家長を見るが如し。任意的なるものは毫も抑壓の念をその間に感ぜず、他の意を以て喜んで己の意とす。

花に對する我等の趣味が如何に異なるかを見よ。薔薇は枝ながら幹ながらの姿の美はしきにあらず、花一輪の色の艶に、香の芳しきなり。櫻は一枝の趣を賞するより、峰に亙り川に沿ひて、雲とたなびきたる態の目ざましきなり。「花瓶に挿す時、西洋人は花ばかりをちぎりて手毬の如くし、日本人は葉も枝もその儘に、願はくはこれに置く朝露をも落さゞらんとす。一は枝を撓

チューリップ Tulip

ヒヤシンス Hyacinth

めて花輪を作り、花瓣を卓上にふり撒きて歡を助くるに、一は床上の盆石・盆栽に自然の大景を方寸に寫す。彼は色彩の變化を喜ぶに、此は形態の多趣なるを賞すること、恰も油繪と水墨畫との異なるが如し。同じ菊を見るも、彼は物を重んじ、此は形を主とすといふ。西洋の草花のチューリップ・ヒヤシンスなど、その葉に何の趣もなくして、その花の妖艶なるは、寧ろ我等の眼に毒毒しと感ぜらる。秋の野の女郎花・尾花、その花に何の美しきことかある。されど、有るか無きかの黄花を捧げてなほたよ〳〵と下蔭の蟲の音にも搖ぐ樣、ますほの色はやがて白くほゝけて、露に濡れ風



ヒヤシンス　チューリップ

に靡く趣は、我が胸にしみて忘れられず。日本人が花を愛するはその外形に非ず、賦色に非ずして、その風情にあり、直ちに自然の懷にわけ入りてその眞實を握るにあり。かくしてこそ自然を愛し、自然を尙ぶなれ。自然に親しむことの深きは、これ日本國民の特性なり。（國文學史講話）

一茶
小林彌太郎
俳人
信濃柏原生
文政十年（一八二七）
歿
年六十五
本山荻舟
名は仲造
新聞記者
明治十四年岡山
縣生

三　畸人一茶

本山荻舟

柏原の名主嘉右衞門がいそ〳〵として俳諧寺を訪れた。

「すぐにこれから、私と一緒に本陣まで來て下され。」

「何御用で。」

「はて大切な御用ぢや。加賀樣參勤の御途次、當宿にお泊りなされて、此方の風流をお聞きなされ、是非其の發句を見たいとあつて、目通り仰付けられたのぢや、何と有難い事ではないか。」

柏原
長野縣上水内郡
柏原村
俳諧寺
一茶の家の號

「折角ぢやが、御免を蒙らう。」

「あれまあ、何をいふのぢや。」

「宇宙萬物さうした御用で俗化されてしまふのが、私は大嫌ひなのぢや。」

きよとんとしてゐた嘉右衞門は、瞞すに手なしと、

「いや、これは私が惡かつた。御用といつたは、つい何時ものの口癖が出たので、加賀樣からは入懇のお招ぢや。わざ〳〵わしの處へお使を下されて、表立つてのお使者では、却て此方が迷惑であらう、どうぞ私からさう云つて、懇に同道してくれとのお賴みぢや。此方の氣心はよう知つてゐながら、ついあんな事を云つたのは、重々私のあやまりぢや。それが爲、若しも此

方が來て下さらぬと、私は腹切仕事ぢやから、どうぞさういはずに機嫌を直して、一寸でも顔を出して下され。」

「あはゝ、腹切仕事はよく出來た。併しそれ程迄にお前樣を困らせては氣の毒ぢや、同道しませう。」

「やれ有難い。それでやう〳〵落着いた。」

「併し衣服は改めない。尤も改める衣服も無いが。此の古布子でよからうの。」

古布子を二三度振つたまゝ、すぐに引懸けて出掛けようとする一茶の袖を、嘉右衞門は一寸控へて、

「も一つ私の願ぢやが、何といつても先は百萬石の加賀樣ぢや。此方も何時もの氣性を止めて、少しは御機嫌取りに、體のよい

おのれがすがたにいふ
ひいき目に見て
さへ寒きそぶり
かな

俳諧寺
一茶肖像

春甫墨信畫

小林一茶筆蹟

お世辭でも云ふ樣にして貰へまいか。」

「あはゝ、是は又異なお賴みぢやな。併し外ならぬ名主殿の事ぢや。思ひ切つて、やりませう。」

「有難い〳〵。何時も其の樣に素直に云つて下さると、此方も好いお人ぢやがなあ。」

「あはゝ、お前樣も亦、何

孔釋
孔子と釋迦

時も其の樣に腰が低いと、好い名主殿ぢやがなあ。」

一茶は皮肉に笑ひながら、弊衣垢面、傴僂で跛で醜い姿を恥づる色も無く、平然として嘉右衞門と一緒に歩んだ。

柏原の本陣には梅鉢の紋打つた幕を張渡し、盛砂に打水、高張提灯、儀容堂々として百萬石の威を示してゐたが、前田侯は案外打寛いだ體で一茶を引見した。嘉右衞門は無論御前へは出られなかつた。

「其方が一茶か。よう參つた。豫て風流の名は聞いて居たが、俳味とは、どんな事ぢやの。」

一茶畏るゝ氣色も無く、膝を進めて、

「俳諧の道は孔釋の道と同じでござる。今の俳諧を云ふ者は、唯題を得て發句を作るだけの事。共に談ずるに足りませぬ。」

「左樣か。して其方の俳諧はどうぢやの。」

「山水風月、皆これ俳家生涯の事でござる。心の赴く儘に發するのが、卽ち自然の俳諧でござつて、巧まぬものこそ最も俳味は濃やかでござらう。尸位素餐の輩に眞の俳諧が解らう道理はござりませぬ。」

と傍若無人の放言に、席に在る者は色を變へたが、侯は却てにこやかに、

「齒に衣着せずよく申した。聞きしに違はぬ其方の器量。予は其の意氣が氣に入つたぞ。」

「あはゝ、恐れ入りまする。」

「これ、一茶に膳部を取らせよ。」

「はつ。」

やがて運ばれた膳部に對しても、一茶は何の遠慮も無く心のまに頂戴した。次いで引出物として、時服一領下された。一茶は一寸考へてゐたが、にこりと笑つて、

「有難く頂戴仕りまする。」ではこれでお暇を。」

「左樣か、大儀であつたの。」

一茶は御前を下らうとして、何故かふと躊躇した。

「どう致したか。」

「いや、飛んだ事を失念致しました。高貴の御前へ出たら、必ず追從申すやうにと、折角名主に賴まれて參つたのに、とんと忘れて居りました。改めて御世辭を申し上げます。」

と一茶は額の汗を拭きながら低頭した。

「はゝゝ、面白い事を申す、其の罰として一句よまぬか。」

子供まで、のんのうと呼ぶ梅の花。

一茶としては珍しく如才のない句であつた。

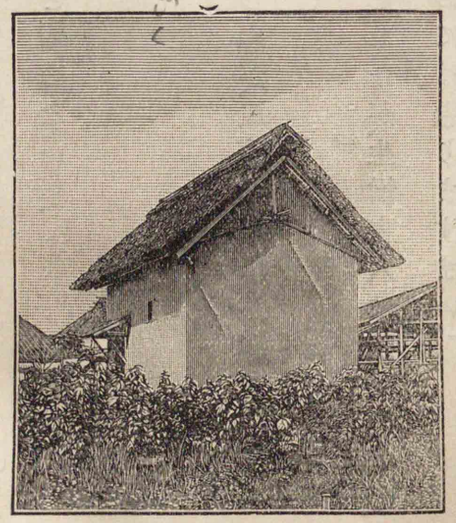
上首尾で本陣を出た一茶は。

間も無く庵に入ると、早速硯を引寄せて、塵紙の皺を伸し。禿筆を嚙んで、

何のその、百萬石も笹の露。

と書いて見た。門人は顏を見合はせた。

享和某年にぶらりと又江戸へ出た一茶は、藏前の札差で井筒屋



一茶の舊宅

夏目成美　俳人　江戸の生　文化十三年（一八一六）歿　年六十八

竹阿　その頃の一茶の號

八右衛門と云つた夏目成美の許を訪ねた。

「信州の竹阿と申すものぢやが、御主人御在宅ならお目に懸りたい。」

店に居た番頭が、裝を見て眉を顰めながら、

「どんな御用ですか。」

と無愛想な挨拶をした。

「別に用事といふではござらぬが、風流の道に遊ぶ者、御高名を慕うてお訪ね申したのぢや。」

「さうですか。それは折角でしたが、生憎主人は、近頃病氣で寢んでゐますから、とてもお目には懸りますまい。」

「ほう、御病氣で御目に懸れぬ。それは殘念ぢやが、致し方が無い。重ねてお訪ねもなるまいから、誠に申しかねましたが、一

御厩橋　隅田川に架けてある橋

寸料紙と筆とを拜借願ひたい。」

信濃では、月と佛とおらが蕎麥。

「飛んだお邪魔を致しました。」

其の儘暇を告げて、すたゝ〳〵御厩橋の方へ歩いた。

「若し其處へ御出でのお方、一寸御待ちなされて下さい。」

「呼ばれたのは、私の事かのう。」

「へい貴方が信州のお客樣でしたな。」

「信州の乞食坊主ぢやが、してお前樣は。」

「井筒屋の者で御座います。只今は飛んだ失禮を致しました。朋輩の者が大變主人に叱られました。お殘し下さいました句を主人に見せました所、お目に懸りたいと申しますから、ど

うぞもう一度御立寄を御願ひ申したいので。」

「はゝゝ、それは却て痛み入りました。固よりお目に懸りたくて御訪ね申したのぢやから、幾度でも戻りませうとも。」

一茶は快く踵を返した。

成美は若い頃から脚を病んで、起居も自由を缺き、自ら不隨齋と號して居た。不具な一茶に對して同病相憐む心からでもあつたらう、快く家に留めて、何時までも逗留することを勸めた。

「話は後でゆつくり出來る。先づ湯にでも入つて、旅の疲を休めるが宜しからう。」

「それは何よりよい。湯といふものには最早幾月對面せぬか解りませぬわい。」

「あゝ、すつかり旅の垢を落して、久し振に好い心持でござりました。」

と云ひながら、座敷へ戻つた一茶の顏を見ると、青や赤や色々の斑が、隈取の樣に染みついて居るので、成美は思はず噴きだした。

「はゝゝ、どうなされた。」

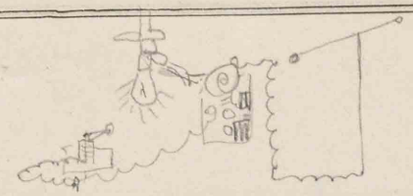
「はて何が其の樣にをかしうござります。」

と、何にも知らずに平氣でゐるのが益をかしい。

「何がではありませんよ、まあ一度鏡を見なさるが好い。」

「鏡などといふ物は、ついぞ見た事もござりませんが、一體どうしたといふので。」

「いや、どうもかうも無い。湯にはひつて何をして御出でなされたか。そればかりではない。兩手にまで其の通りえたい



の知れぬ斑點をつけてゐられるではござらぬか。

「や、これは大變。はゝゝゝ、解りましたよ。湯から上つて軀を拭くのに、つい手拭を忘れて出たので、取りに入るのも面倒と、袂に在つた風呂敷で間に合はせたが、偖は此の色が移つたのでござらう。」

と、平氣で取出して見せた。それはかなり汚れた更紗の風呂敷であつた。一茶にこんな無頓着は珍しい事ではなかつた。

最屓目に見てさへ、蹇き素振かな。

めでたさも中位なり、おらが春。

露散るや、各〻明日は御用心。

痩蛙負けるな一茶こゝに在り。

文政二年
仁孝天皇の御代
(一八二九)

罷出たるは、此の藪の墓にて候。

等は何れも人口に膾炙し、又よく一茶の人と爲りを現してゐる。

文政二年の冬十月十六日から一茶は中風に罹つたので、再び遊歴の望を絶ち、餘命幾何もない事を感じて、壽命決定の辭を作り、

兎も角も、あなた任せの年の暮。

と吟んだのは師走二十九日、五十七歳の暮であつた。併し壽命はまだ殘つて、復新しい春を迎へたので、元日の句に、

今年から丸儲けぞよ、娑婆の空。

とよんで、以來蘇生坊と稱して居た。

文政十年霜月、病氣の上に老衰が加つて、十九日遂に臨終と見えた。門人が、「何ぞ辭世でもありませぬか。」といふと、一茶はかすか

に口を動かして、盥から盥に移るちんぷんかん。

と云つた。そして木の葉と共に散つた。享年六十五。火葬にして明專寺に葬つた。

其の後門人が記念に建てた「松蔭に寢て喰ふ六十餘州かな。」の句碑は、今も殘つて居るのである。（名人畸人）

明專寺　柏原にある寺

小泉八雲　英國よりの歸化人名ラフカディオ、ハーン　Lafcadio Hearn（1850—1894）詩人　東京帝國大學文科大學講師　明治三十七年歿　年五十五

四　松江の曉

小泉八雲

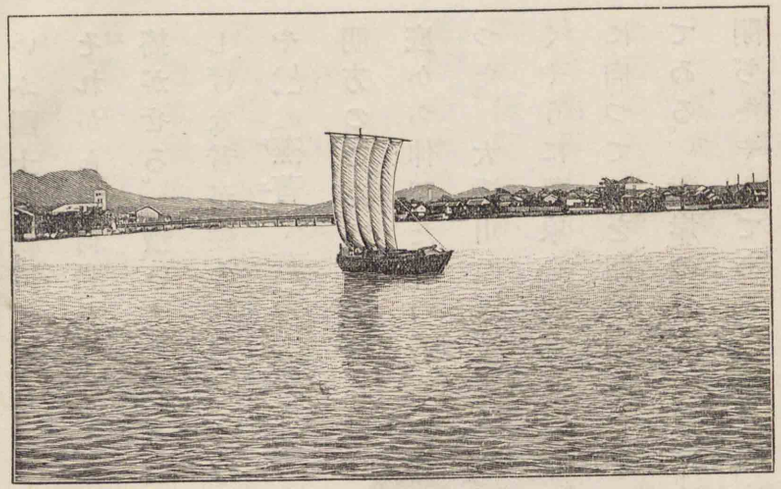
松江で朝の夢を破る最初の物音は、ちやうど耳底でゆるやかな大きな脈が搏つやうに響いてくる米搗の音である。杵の落ちる響が一定の拍子で洩れてくるのが、日本人の日常生活に伴ふあらゆる音響の中で最も哀れに思はれる。米搗の音は日本といふ國土の脈搏である。

それから禪刹洞光寺の大きい鐘がごうんと響いて、市街の空を搖がせる。續いて私の家に近い材木町の地藏堂から太鼓の淋しげな音が晨の勤行を告げる。最後に行商人の物賣の聲、「大根やい。」「蕪菁や蕪菁。」「薪や薪。」

明方のこんな物音に起されて、私は二階の障子を開けて、河畔の底から伸びた春の若葉の軟かな綠の雲越しに朝景色を眺めやつた。大橋川の幅廣い、鏡のやうな河口が、遠くの方では、わなゝくやうに萬象を映寫して微かに光つてゐる。此の川は宍道湖に向つて口を開け、湖は右手へ擴がつて、杳乎たる連丘に包まれてゐる。對岸の日本の家屋は戸が皆閉つてゐるので、恰も箱を閉ぢたやうである。夜は明けたが、日はまだ出ない。遙かに見

洞光寺　松江市雜賀町にある曹洞宗の寺

大橋川　中海と宍道湖との間を通ずる川



松江と宍道湖

渡すと、薄色の霞が湖水の盡端に長くたなびいてゐる。その星雲狀をした長い帶は、日本の昔の畫で見る通りであるが、實際の現象を眺めたことのない者には、畫工が奇を衒つたとしか思はれないに相違ない。山といふ山をこの霞が蔽うて、峰から峰へ、はて知らぬ長さの紗のやうに横に延びて居る。だから湖水は實際より遙かに大きく、昧爽の空の色と入交つた

美しい幻の海となつて見える。山々は霧の中に浮ぶ島嶼で、夢の樣な一帶の丘陵は果しのない土手道かと怪しまれる。そして霧が立つに連れて、その趣はおもむろに變つて行く。朝日の黄色の緣が見えてくると、今までのよりは更に弱い、細かな光線——分光鏡の紫と青貝色——が水面を射る。梢の上は弱い光を受ける。水のかなたにある高い建物の木地の色が、美しい靄の爲に蒸氣の立つ黄金色へとかはる。

朝日の方へ向くと、澤山橋桁の並ぶ長い木造の大橋の彼方に、一艘の船が今しも帆を揚げようとしてゐる。こんな奇妙な恰好の美しい船を見た例がない。正にこれ蓬萊の夢である、霞にぼけて、薄青い光の中で金色に震へてゐる。

庭先の川端から手を拍つ音が起つて來る。一回、二回、三回、四回。その手の持主は植込に遮られて見えない。しかし對岸の埠頭の石段を下りる男や女の姿が見える。めい〳〵帶に、小さい青手拭を挿んでゐて、顏と手を洗ひ、口を漱ぐ。これは神道の祈を捧げる前に必ず行ふ潔齋である。それから顏を朝日に向け、四たび手を拍つて拜む。長い橋の上からも他の拍手の音が反響の如くに出てくる。遠くにある、輕い優美な、そして新月のやうに彎曲した小舟からも出てくる。この頗る異樣な恰好の舟の上から、手も足も裸の漁師が、黃金色をした東雲の空を拜んでゐるのである。最早拍手の數が增して、殆ど鋭い音響の連發となつた。それは人々が今皆朝日——お日樣——天照大神を拜んでゐるからである。「いとも貴き日の造り主よ。この心地よき日光

杵築の大社　官幣大社出雲大社　祭神は大國主命

一畑山　島根縣簸川郡にある名刹　本尊は藥師如來

を賜ひて世界を麗はしくなし給ふことを謝し奉る」。言葉はこの通りでないまでも、これが無數の人の衷心である。

朝日に向つてだけ手を拍つ者もあるが、大概は西の杵築の大社に向つてもさうするのである。顏を東西南北に向けて群神の名を低聲で唱へる者さへ隨分ある。天照大神を拜んだ後、一畑山の高峰を眺めて、盲人の眼を開き給ふといふ藥師如來の大伽藍のある處に向ひ、今度は佛教の儀式に從ひ、掌を合せて輕く擦るものもある。しかし日本で最古の此の國では、佛教徒も亦神道信者であるから、誰もノ〳〵古風な神道の祈の文句を唱へる。

「拂ひ給ひ、淨め給へ、とほ神ゑみため」。

手を拍つ音が歇んで、一日の仕事が始り出し、橋の上にはからころといふ下駄の音がだん〳〵高く響いてくる。大橋の上で鳴

る下駄の音は忘れられない音である。――速くて、陽氣で、音樂的で、盛な舞踏の音のやうである。實際また舞踏である。みんなが爪先で歩いて行く。朝日の射した橋の上を通る數へきれぬ人の足がちら〳〵するのは驚くべき光景である。この足は皆細くて、恰好な均齊を得てゐて、希臘の古甕に描いた人物の足のやうに輕やかである。

やがて學校へ急ぐ子供達が出てくる。彼等の駈ける時に、綺麗な飛白の着物の濶い袖が波動するのは、ちやうど大きい蝶が羽搏きをするやうである。親船は白色や黄色の大きい翼を擴げるし、埠頭の側で夜中眠つてゐた小蒸氣船は煙筒から煙を吐き始める。（まだ知らぬ日本の曙見）

國木田獨歩
名は哲夫
小説家
千葉縣海上郡銚子町生
明治四十一年歿
年三十八

逗子
神奈川縣三浦郡にある町
相模灘に臨む
鎌倉町の東南一里半

御最後川
逗子にある田越川の別名

六代御前
平維盛の子
平家滅亡の後此の地で斬られた

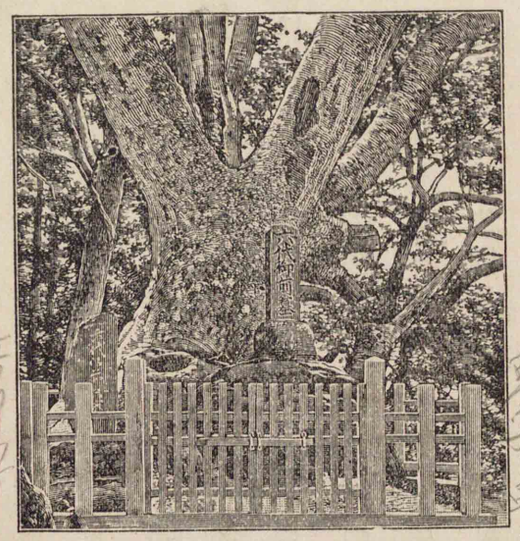
五　たき火

北風を背にし、枯草白き砂山の崖に腰をかけ、足投げいだして、伊豆連山の彼方に沈む夕日の薄き光を見送りつゝ、沖より歸る父の舟遲しと俟つ逗子あたりの童の心、その寂しさ、うら悲しさは如何あるべき。御最後川の岸邊に茂る葦の枯れて、吹く潮風に騒ぐ、其の根かたには夜半の滿潮に人知れず結べる氷、朝の退潮に破られて殘りひねもす解けもせず、夕闇に白き線を水際に引く。若し旅人、疲れたる足を此のほとりに停めんに、何等の感もなく行過ぎ得べきか。見よ、彼處なるは、哀れを七百年の後なる今に惹く六代御前の森なり。風其の梢に鳴れり。

落葉を浮べて緩やかに流るゝ此の沼川を漕上る舟、知らず、何れの時か心地よき。追分の節面白く此の舟より響き渡りて、霜夜

の前ぶれをかなせる。あらず、あらず、只見る、何時もく物言はぬ、笑はざる、歌はざる漢子の、農夫とも漁人とも見分け難きが寂しげに艪あやつるのみ。

鍬かたげたる農夫の影の、橋と共に朧にこれに映る、かの舟、音もなくこれを搔亂しゆく。見る間に、舟は葦がくれ去るなり。日影なほ鐙摺の端にたゆたふ頃、川口の淺瀨を、村の若者二人、裸馬に跨りて靜かに歩ませる、畫めきたるを見ることもあり。かゝる時、濱には見渡すかぎり、人らしきものゝ影なく、引上げたる舟の舳に



六代御前の墓

鐙摺　逗子町内にある小山

止れる烏の、聲をも立てぐ、翼打ものうげに鎌倉の方さして飛びゆく。

或年の十二月末つ方、年は迫れども童は何時も氣樂なる風の子、十三歳を頭に九つまで位が七八人、砂山の麓に集りて何事をか評議まち〳〵、立てるもあり、砂に肱を埋めて頰杖つけるもあり、坐れるもあり。此の時、日は西に入りぬ。

評議の事定まりけん、童等は思ひ〳〵に波打際を駈けめぐり始めぬ。入江の端より端へと、おのがじし、見るが間に分れ散れり。潮遠く引きたるあとに殘るは朽ちたる板、緣缺けたる椀、竹の片、柄の折れたる柄杓などの色々、皆一昨日の夜の荒の名殘なるべし。童等は一々これらを拾ひ集めぬ。集めて水際を去る程よき處、乾ける砂の上に積みたり。積みたる物は悉く濡れ居たり。

小坪　逗子町の西端の小漁港

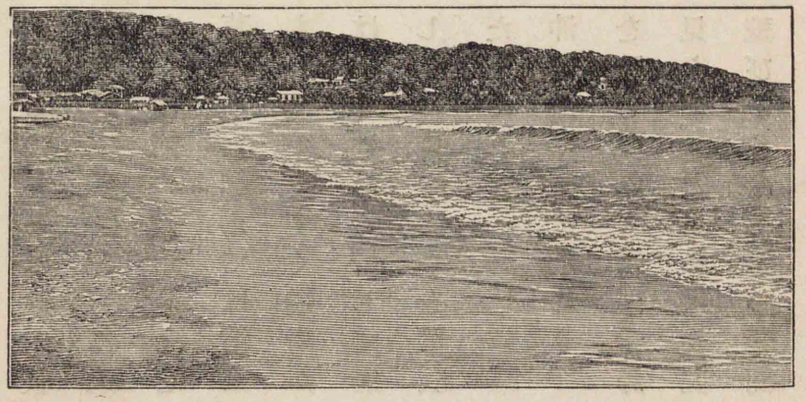
此の寒き夕まぐれ、童等は何事を始めたるぞ。日の西に入りてより程經たり、箱根・足柄の上を包むと見えし雲は黄金色にそまりぬ。小坪の浦に歸る漁船の、風落ちて陸近ければにや、帆をおろし漕ぎゆくもあり。

硝子の碎け失せたる鏡の、額縁めきたるを拾ひて、「これを燒くは惜しき心地す。」といふ兒の圓顔、色黑けれど愛らし。「こは必ず能く燃ゆ。」と、此の群の年かさなる子、おのが力に餘る程の太き丸太を置きつゝ言へり。「其の丸太は燃えじ。」と圓顔の子いふ。「いな、燃さでおくべき。」と、年上の子いきまきて立ちぬ。傍に一人、「今日は獲ものゝ何時になく多き樣なり。」と喜ばしげに叫びぬ。童等の願は是等の獲物を燃さんことなり。赤き焰は彼等の狂喜なり。走りてこれを躍り越えんことは互の誇なり。されば

江の島　鎌倉の西の海中にある小島

彼等、このたびは砂の彼方より、枯草の類を集め來りぬ。年上の子、先に立ちて此等に火をうつせば、童等は圓く火を取卷きて立ち、竹の節の破るゝ音を今か〳〵と待てり。されど燃ゆるは枯草のみ。燃えては消えぬ。煙のみ徒らに立騰りて、木にも竹にも火はたやすく燃附かず。鏡の枠は僅かに焦げ、丸太の端よりは怪しげなる音して湯氣を吹けり。童等は交る〴〵砂に頭押しつけ、口を尖らして吹けど、生憎に煙眼に入りて、皆の顔は泣きたらんごとし。

沖ははや暗うなれり。江の島の影も見わけ難くなりぬ。干潟を鳴きつれて飛ぶ千鳥の聲のみ聞えて、彼方此方寂しく、其の姿見えず。と見れば、夕闇に白きものはそれなり。あわたゞしく飛びゆくは鳴、かの葦間よりや立ちけん。



御最後川の川口

此の時、一人の童忽ち叫びていひけるは、「見よや、見よや、伊豆の山の火はや見えそめたり、如何なればわれらが火は燃えざるぞ。」と。童等は齊しく立ちあがりて沖の方を打守りぬ。げに相模灣を隔てゝ、一點二點の火、鬼火かと怪しまるゝばかり、明滅し、動搖せり。これ正しく伊豆の山人、野火を放てるなり。冬の旅人の日暮れて途遠きを思ふ時、遙かに望みて泣くは實に此の火なり。

「伊豆の山燃ゆ、伊豆の山燃ゆ。」と、童等節

面白く唄ひ、沖の方のみ見やりて手を拍ち、躍り狂へり。あはれ此の罪なき聲、たそがれ時の寂しき濱に響きわたりぬ。囁く如き波音、入江の南の端より白き線を立てゝ走り來り、これに和したり。潮は滿ちそめぬ。「此の寒き日暮に何時までか濱に遊ぶぞ。」と呼ぶ聲、砂山の彼方より聞えぬ。童の心は伊豆の火の方にのみ馳せて、此の聲を聞くものなかりき。「歸らずや、歸らずや。」と二聲三聲、引續きて聞えけるに、一人の幼き兒、聞きつけて、「母呼び給へり、最早打捨てゝ歸らん。」と言ひ、忽ち彼方に走りゆけば、殘の童等また、「さなり、さなり。」と叫びつゝ、競うて砂山に駈登りぬ。火の燃附かざるを口惜しく思ひ、かの年嵩なる童のみは、後振返りつゝ馳せゆきけるが、砂山の頂に立ちて、將に彼方に走り下らんとする時、今ひとたび振向きぬ。ちらと眼を射たるは火なり。

「こは如何に、われらの火燃えつきぬ。」と叫べば、童等驚き怪しみ、立歸りて砂山の頂に集り、一列に並びて此方を見おろしぬ。

げに今まで燃附かざりし拾木の、忽ち風に誘はれて火を起し、濃き煙渦まき上り、紅の焔の舌見えつ隠れつす。竹の節の裂くる音聞え、火の子舞立ちぬ。火は正しく燃附きたり。されど童等は最早此の火に還ることをせず、只喜ばしげに手を拍ち、高く歡聲を放ちて、一齊に砂山の麓なる家路をさして馳下りけり。

今は海暮れ、濱も暮れぬ。冬の寂しき夜となりぬ。此の寂しき逗子の濱に、主なき火は寂しく燃えつ。

忽ち見る、水際をたどりて、火の方へと近づき來る黑き影あり。

こは年老いたる旅人なり。彼は今しも御最後川を渡りて濱に出で、濱傳ひに小坪街道の方へ向へるなり。火を目がけて小走に歩む其の足音重し。

嗄れたる聲にて、「よき火や。」と幽かに叫びつゝ、杖投捨てゝ忙しく背の小包を下し、兩の手を先づ焔の上にかざしぬ。其の手は震ひ、其の膝はわなゝきたり。「げに寒き夜かな。」言ふ齒の根も合はぬが如し。焔は赤く其の顏を照しぬ。皺の深さよ。眼いたく凹み、其の光は濁りて鈍し。頭髪も髯も胡麻白にて、塵にまみれ、鼻の先のみ赤く、頰は土色をなせり。あはれ何處の誰ぞや。

指してゆくさきは何處ぞ。行方定めぬ旅なるべし。

「げに寒き夜かな。」獨りごてる時、總身を心ありげに震はせぬ。

かくて溫まれる掌もて心地よげに顏を摩りたり。いたく古びて處々古綿の現れたる衣の、火の近き裾のあたりより湯氣を放つは、朝の雨に霑ひて、なほ乾きもあへざりしなるべし。

「あな心地よき火や。」言ひつゝ投げやれる杖を拾ひて、これを力に片足を揚げ、火の上にかざしぬ。脚絆も、足袋も、紺の色あせたるのみならず、血色なき小指さへ現れぬ。一聲高く竹の裂くる音して、勢よく燃上れる焰は足を焦さんとす。されど翁は足を引かざりき。

「げに心地よき火や。誰が燃しつる火ぞ、忝し。」言ひさして足をかへつ。「十年の昔、樂しき爐見捨てたりしよりこのかた、未だかかる嬉しき火に遇はざりき。」言ひつゝ火の奥を見つむる目なざしは、遠きものを眺むるが如し。火の奥には過ぎし昔の爐の火、昔のまゝに描かれやしつらん。鮮かに現るゝものは兒にや、孫にや。昔の火は樂しく、今の火は哀し。あらず、あらず。昔は昔、今は今。「心地よき此の火や。」言ふ聲は震ひぬ。荒々しく杖

を投げやりつ。火を背にし、沖の方を前にして立ち、體をそらせ、兩の拳もて腰をたゝきたり。仰ぎ見る大空、晴れに晴れて黑ずみ、銀河霜を包みて、遠く伊豆の岬角に垂れたり。

身うち煖くなりまさりゆき、ひぢたる衣の裾も袖も乾きぬ。あ

あ此の火、誰がもやしつる火ぞ、誰が爲にとて、誰がもやしつるぞ。今や翁の心は感謝の情に滿たされて、老の眼は涙ぐみたり。風なく、波なく、さし來る潮の、しみ〴〵と砂を浸す音を、翁は眼閉ぢて聽きぬ。さすらふ旅の憂さも此の刹那には忘れつべし。翁が心、今一たび童の昔にかへりぬ。

あはれ此の火、やう〳〵に消えなんとす。竹も燃盡き、板も燃盡きぬ。かの太き丸太のみは猶よく燃えたり。されど翁は最早これを惜しとも思はざりき。たゞ立去りぎはに、名殘惜しくて

や、兩手もて輪をつくり、抱く樣に胸のあたりまで火の上にかざしつゝ、眼しばたゝきてありしが、いざとばかり腰打伸し、二足三足往かんとして立還り、燃えのこりたる木の端々を搔集めて火に加へつ、勢よく燃えあがるを見て、心地よげに打笑みぬ。

翁のゆきし後、火は紅の光を放ちて、寂寞たる夜の闇のうちに覺束なく燃えたり。夜更け、潮滿ち、童等が焚きし火も、旅の翁が足跡も、永久の波に消えゆきぬ。（武藏野）

六　空行く雁

一萬　曾我十郎祐成の幼名
箱王　曾我五郎時致の幼名

頃は人皇第八十一代安德天皇の養和元年、あらたまの年立歸りて、一萬は九つ、箱王は七つにぞなりにける。或夕暮、箱王は母の膝の上に戲れながら、「いかに母御前、父はいづくにおはしますぞ

曾我殿　祐信
工藤一萬　祐經
鎌倉殿　源頼朝

や。其の佛は何國にましますぞや。行きて拜み奉らばや。母御前、いざさせたまへ。」といひければ、遙かに忘れたる空も今更思ひ出されて、消えいるばかりなり。母泣く〳〵のたまひけるは、「あの曾我殿こそ己等が父にてあれ。」と心強く語られけれども、涙に咽びて陳じやる方ぞなかりける。箱王重ねて申しけるは、「父御前は、『まことやらん、狩場より歸りたまふ道にて、工藤一萬とやらんに射られて死にたまひぬ。』と兄御前は語らせたまふぞや。當時鎌倉殿の切りものにて、鎌倉より伊豆へ下る時もあり、伊豆より鎌倉へ上る時もありとや。我等をも殺さんとや思ふらん。我等が此の里にあるを知らでや過ぐらん。」など大人しく語れば、母より始めて女房たちまで皆袖をぞ絞りける。

かくて夏も過ぎ、秋も闌け、九月十三夜の月隈もなかりけるに、兄

弟二人庭に出でて遊びけるに、五つ連れたるかりがねの南をさして飛びゆくを見て、一萬申しけるは、あれ見たまへ、箱王殿。空に飛ぶ翼も、別の翼ぞ交へぬ。五つあるは、一つは父、一つは母、三つは子どもにぞあるらん。物言はぬ鳥類だにかくの如し。我等人倫に生れながら、和殿は弟、我は兄、母は實の母なれども、曾我殿は實の父にてましまさぬこそ悲しけれ。我等が父をば河津殿と申してありきとか

曾我兄弟飛雁を見る　（廣重筆曾我物語圖會）

や。父だにも世におはしまさば、馬・鞍をも賜はり、弓矢をも持ちて、今ぞ思ふやうに物を射ありきなん。我々より幼き者も馬・鞍・弓・矢を以て物を射ありく事の羨ましさよ。これらの事ども思ひ續くれば、いつよりも今宵は父御前の戀しく思ひ參らせらるるぞや」とて、袖に顔を差入れてさめ〴〵と泣きければ、弟も小賢しく顔をあはせて泣きゐたり。一萬の乳母の女房之を聞きて、「あなあさまし、人もこそきけ。いかに和上薄たち、夜も更けぬるに、さやうにはおはするぞ。とく〳〵入らせ給へ」と恐しげにいひければ、二人の者は門外に逃げいでて、思ふやうに飽くまで泣きて後に、内に入りにけり。

其の後は、二人の者ども我が身の程を知りぬれば、世になき父を慕ひつゝ、語りあはするまではなけれども、唯目ばかりを見合せ

て互に袖をぞ濡しける。未だ十歳にも満たざるに、あはれは深く思ひ知りけり。或時兄弟は竹の小弓、薄刃の小矢を取添へて遠侍に出でて遊びけるが、明障子のありけるに二人立向ひ、あなたこなたに射通して、一萬、箱王に申しけるは「我等もいつか成長して、和殿は十三、我は十五にだにもならば、如何ならん野山にてもあれ、親の敵祐經をかくの如く刺合ひ、射取りて後には、ともかくもなりなん。和殿も弓をよく射習ひたまへ、我も習はん。弓矢は男の一の能にてあるなるぞ。」といひければ、弟も打頷きけり。年ばへには恐しき事かなと人々思ひけり。（曾我物語）

七　曾我兄弟

第三幕

森林太郎

森林太郎
號は鷗外
醫學者
文學者
醫學博士
文學博士
陸軍々醫總監
帝室博物館總長
石見國津和野藩生
大正十一年歳
年六十一

幕の外

十郎・五郎登場。續松を把る。

十郎　見て置いた、これは假屋ぢや　油斷いたすな。

五郎　心得てござる。

十郎　こりや、五郎。父上がお討たれなされてから、十七年の久しい間、我々二人が念頭を、離れぬ遺恨を霽すは今ぢや。

西王母が園の桃は
三千年に只一度
花を開くと傳へ聞く。

五郎　又金輪王の出づる時、
現るといふ優曇華も、
稀に逢ふ日の譬なり。

西王母
漢の武帝の頃の仙女

金輪王
佛敎で須彌山の四洲を統治する帝王だといふ

十郎　待ちに待つた當の敵、左衛門尉は言ふに及ばず、いで逢ふものに容赦はいらぬ。ぢやが、女ばらも許多ある。逸つて無益の殺生すな。

五郎　仰やるまでもござらぬ。

十郎　いざ。

五郎　いざ。

（二人幕を褰げて入る）

板戸をさしたる假屋の緣の前。

十郎五郎登場。

五郎　兄上、敵はどこへ參つたでござらう。

十郎　（左手を顧みる。）　晝酒飲うでをつたのは、今の假屋ぢや。それにあの通人影も無い。彼奴我等が寄せると悟つて、急に臥戸を換へたと見える。はて、どこを尋ねたものでござらう。

（曾我十郎舞臺姿）

五郎　此の上は是非がない。假屋々々を片端より搜すまでぢや。

十郎　待て。大切の場ぢや。

（假屋の板戸を開き、龜鶴燭を秉りて登場）

龜鶴　波に漂ふ沖津舟しるべの山はこなたぞや。

十郎　さては龜鶴がしるべいたすか。五郎、續け。いざ。

五郎　いざ。

（龜鶴入る、十郎・五郎續き入る。夜廻の卒二人、一人は右手より、一人は左手より登場）

第一の卒　や。これはお役目御苦勞ぢやの。

第二の卒　お互ぢや。（板戸の方を見る。）こゝはどなたやらの假屋ぢやつたの。

第一の卒　こゝか。不斷はお屋形の宿直の人達が、代り合うてさがつて息まつしやる處ぢやが、今夜は工藤殿が客人と一しよに這入られた。

第二の卒　客人といふのはあの象のやうに太つた宮司殿か。

第一の卒　さうぢや。あゝ又降つて來た。どりや一廻してしまはうか。

第二の卒　そんなら又後に逢ふぞよ。

宮司　備中吉備津宮司　大藤內成景

妹尾　妹尾兼康　平家の士

（卒二人入り違ひて退場。大藤內板戸を蹴放ちて登場、十郎・五郎續きて登場。）

大藤內　お主達は曾我の同胞ぢやな。工藤殿を殺した下手人はわしが見極めた。後日に異論を言ふまいぞ。

十郎　何を。

（十郎、大藤內を一刀切る。大藤內俯臥になる。五郎腰を切放す。）

五郎　馬は吼え
牛は嘶く
世なればや、
足二つもて
四つに這ふらん。

十郎　（笑ふ。）こやつ平家の世盛には、妹尾に附いて榮を求め、その罰に召放された領地を、又工藤の手で取返しをつた。世渡

上手奴。四這に這うて世を渡れ。

（十郎・五郎共に笑ふ。）

もうこれまでぢや。潔く名告つて討死せう。

五郎　さうぢや。兄上、いしくも言はれた。

十郎　やあ。假屋の人々。

かねて音にも聞きつらん、

目のあたりには今し見よ。

伊豆の國人河津の次郎祐親には孫、三郎祐泰がわすれがたみ、養家の氏を冒して曾我の十郎祐成、

五郎　同じく五郎時致、只今假屋の内に於て、父の敵工藤左衛門尉祐經を討取つたり。

十郎　我と思はん人々は、

疾う〳〵こゝにいで合ひて、

二人　御討留め候へ。

（二人暫く屏息して物音を聞く。）

五郎　誰も出ぬではござらぬか。

十郎　無下のものぢや。さらば馳廻つて名告らう。五郎まゐれ。

將軍家の屋形。　蔀の外、板緣。雨。

五郎登場。

五郎　兄上。兄上。

仁田の聲（舞臺の背後にて）　やあ。假屋の人々承れ。狼藉ものゝ一人祐成は、伊豆の國人仁田の四郎忠常が討取つたり。

鬪の聲（同上）　えい、おう。

五郎　はつ。兄上はお討たれなされたか。此の上は祖父様を自

滅させ、敵工藤を贔屓せられた將軍家を一太刀恨まう。さうぢや。

（五郎縁に登る。五郎丸被衣を被り、すれ違ひ被衣を脱ぎ、背後より五郎を抱く。五郎板縁をふみ拔く。二人無言にて揉合ふ。）（幕。）

第四幕

將軍家の屋形。垂簾。簾の下には諸大名左右二列に坐す。中央前景に狩野介宗茂・新開荒二郎忠氏ゐる。

第一の大名　最早辰の刻になつてござる。犯人を預つた大見の小平太はどう致いたやら。

（第二の大名に）　固より曾我の殿原は奸盗・山賊の類でもござらぬに、笑止にも繩附になり申した。

第二の大名　情ない儀でござる。よしや御假屋を汚したとて、討つた工藤は父の仇ゆゑ、申し宥める道もござらう。御屋形の御座所近く推參致いたと申すからは、罪科は所詮逃れまじまい。

（雜色登場。）

雜色　只今これへ曾我の五郎を召連れてまゐりまする。

（雜色退場。五郎登場。大見小平太實政繩を取る。狩野座を進む。）

狩野　曾我の五郎、承れ。只今これへ召されたは、某と新開とが承つて、敵討の宿意を尋ねる爲ぢや。さあ逐一に申し立てい。

五郎（怒る。）だまれ、狩野介。祖父伊東の次郎祐親が將軍家と不和のため自滅に及んでから以來、久しく落魄いたいてをるが、某とても遠祖左大臣藤原の武智麿が流を汲む、由緒ある身分ぢや。申す程の事はぢきに申さう。若しそれがかなは

武智麿　不比等の子藤原南家の祖

ぬなら、何事も申すまい。

狩野　怪しからぬ事ぢや。某は君命によつて尋ねる。

新開　それを彼此申すのは、犯人の身となつてもまだ君に楯つく所存か。

（曾我五郎舞臺姿）

朝登場。舍人二人、近臣二人隨ふ。狩野退く。新開中央に殘る。）

五郎　（新開に）そこを退いて貰はう。これより物申すに、和殿がそ

賴朝の聲　（簾の内より）いや、待て狩野・新開。曾我の五郎が申す條尤もなれば、賴朝みづから聽いて遣はす。

（簾を半ば捲く。賴

平相國親子　平清盛とその子宗盛

れにゐては、和殿に物言ふに似て快うない。

將軍　新開退いて遣はせ。

新開　はあ。（新開退く。）

將軍　見れば昨夜の雨に、そこの土は濕つてをる。誰かある。曾我の五郎に敷皮を取らせい。

卒　はあ。（卒、右手より敷皮を持出で、敷く。）

五郎　（感激す。）

此の敷皮を見るにつけ、十年の昔ぞしのばるゝ。

年頃六波羅に勤仕して、平相國親子の覺めでたく、名利のために訴訟を構へ、怨毒によつて殘害を行うた小賢しき敵工藤が、時勢の移り變るに乘じて、宇佐見殿によつて御目見え

を賜はり、伊東の莊を拜領し、猶それにも飽足らいで、我々兄弟を殺さうと、讒舌を揮うた爲、

兄一萬は十二歲、

此の箱王は十の時、

由比が濱邊に伴はれ、

引据ゑられし敷皮は

夢見ごこちに春を待つ

苔を摧きし悲涙の座。

今は首尾好く父の仇工藤を討つて怨をはらし、此の世に思ひ置くことなければ、

最期を急ぐわが爲に、

此の一枚の敷皮は、

父に見えん彼岸に

渡す弘誓の舟筏。

有難く拜領いたす。（敷く。）

將軍　殊勝な覺悟ぢや。　然らばみづから尋ねるが、此の度工藤を討取つたのは、年頃の企か、但しは俄かの思立か。

五郎　それは申すまでもない事。　我等が父を討たれたは、十七年の昔。　兄は五歲、某は三歲、しかと意趣をも存ぜなんだが、兄が九つ、某が七つになつて、物心を辨へてから以來は、片時忘れぬ復讐でござる。

將軍　然らば伊豆にある工藤が、十年の久しい間、月に四五たび、乃至十度も鎌倉へ通うたに、なぜ途中では討たなんだ。

五郎　いかにも其の往返には心を附け、足柄箱根・大磯・小磯・由比・小

坪のあたりにたゝずみ、兄弟附け狙うたが、身分ある彼が同勢、多き時は百騎に餘り、少なき時も五六十騎、衆寡敵せず控へ申した。

將軍　ふん。さもあらう。扨工藤は父の仇ゆゑ子細ないが、多くの麾下の侍をば何故妄に傷つけた。

五郎　固より我等兄弟は、かゝる狼藉を企てたからは、刃向ふもののあらん限、千萬騎をも切りなびけうと存じたが、我等の名告る聲を聞いて、足の立所も知らず逃げ行くゆゑ、後日のため一太刀づつ印を附けたまでゝござる。

將軍　して、大藤内はなぜ討つた。

五郎　あれは笑止なものでござつた。恩ある工藤に助太刀もせず、廣言を申したゆゑ、切りすてはいたいたが、所領安堵を喜

んで下國する途中、報謝のために引返したは、せめてもの心掛、今はなか〳〵不便に存ずる。

將軍　神妙な詞ぢや。ぢやが、それ程義理を辨へたそちが、既に敵を討つた上、なぜ予が座所に踏込んだ。

五郎　これは憚ある申し條かは存ぜぬが、流人となられた將軍家の御爲には、祖父伊東の次郎は東道主人ではござらぬか。それが、成行とは申しながら、三浦殿に預けられて自滅致いた。又敵工藤は格外の御引立を蒙つた。これらの遺恨なきにあらねば、一太刀お恨み申した上で、自害いたす覺悟でござつた。

將軍　おう。好う藏さずに申したぞ。此の度の企を前以て存じてをつた同志のもの、乃至手引きのものがあらう。事の序

にそれも申せ。

五郎　さやうなものは一人でもござらぬ。

將軍　さはいへ、母には打明けたであらうな。

五郎　こは仰とも存ぜぬ。鳥獸も子をば思ふ。二人の子供に死にゝ往けと申す親のござらうや。

將軍　おう。一族否運に陷つたそちが申し條としては、一々尤も至極に存ずる。仁田の四郎はをらぬか。

仁田の聲（上手背後にて）　はあ、四郎忠常只今それへ。

（仁田、首桶を持ち、登場。）

仁田　仰によつて曾我の十郎が首級、これに持參いたいてござる。

將軍　五郎。兄に逢はせて遣はすぞ。それ、いましめ解け。

（天見、五郎の繩を解く。）

仁田　實檢の上申し請ひ、和殿に見せる十郎が首級ぢや。いざ對面いたされい。（首桶を開く。）

五郎　懷かしや、兄上。

　　點し列ねし松の火の
　　消えなば共にと思ひしに、

不覺を取つて縛められ、口惜しくもながらへ申す。さるにても、兄上、どうしてお討たれなされたか。よし仁田殿は猛くとも、時致だに居合はせたら。

仁田　いや。和殿の助太刀までもない。十郎が鋭き太刀風に、某は切りまくられ、右の肘と小鬢とに薄手をさへ負うたれど、十郎が運拙く、我が薙刀に拂はれて、刃はほつきと鍔元から。

五郎　なに。兄上の太刀が折れたとか。なぜ我が太刀を兄上に

佩かせなんだか。

仁田　おう。その悔み道理至極ぢや。某とても一門の十郎ゆゑ、首討つ所存はなかつたが、引かうといつた某を、十郎みづから呼止めて、首を我が手に授けたのぢや。

五郎　さてはよしみある御身が手に、兄上好んで掛かられたか。

（五郎歎く。犬房丸鞭を持ち走り出づ。）

犬房　父上の敵、思ひ知れ。（五郎を鞭うつ。）

五郎　や、この小童は何者ぢや。（五郎睨む。犬房たじろぐ。）

仁田　犬房丸、御前ぢやぞ。

五郎　なに犬房丸が御身か。

彼も人の子、穉くて
親を討たれし悲みは

いかでか我に異ならん。
果報の縄に引かれずば、
刃を取りて立向ひ、
御身に討たれん我が身なり。
刑場の土になるわしぢや。せめてもの心遣りに、さあ、其の笞で打つてくれい。

犬房　父上を討つたお前は強い人ぢやと思うたに、優しい事を言うて下さる。それではどうも打たれませぬ。

五郎　おう。さうか。さあ、につくい小わつぱ、打たれるなら、打つて見い。

犬房　なんの打たいで。おのれが、おのれが。（運打す。）

將軍　もう好い、好い。犬房、それで堪忍いたせ。

閫外の職

上古王者之遣ハスレ將也、跪而推レ轂ヲ曰、閫以内者寡人制レ之、閫以外者將軍制レ之。（史記、馮唐傳）

犬房　はつ。（鞭を棄てゝ平伏す。）

將軍　五郎。此の上問ふべき事もないが、頼朝閫外の職を辱うして、勇士猛卒を惜むこと何物にも譬へられぬ。どうぢや。

五郎　志を飜して奉公致してくれまいか。それは存じも寄らぬ事。若し處刑を宥められて、行住心に任せるなら、某は犬房に此の素首を取らせ申さう。犬房が討たいでも、近き惠に代へられぬ遠き恨のまつはれば、いつ謀反人にならうも知れぬ。一しよに死なうと誓うた兄を、久しう待たせるも心苦しい。首刎ねられるを待つ外ござらぬ。（大見に）さあ縄を打たれい。

大見　いや、某は五郎丸が掛けた儘の御身の縄を、君命によつて預り、又君命によつてほどいたばかりぢや。御身に縄打つすべを知らぬ。

將軍　待て、勇士を失ふは遺恨ながら、其の志は奪ふべからず。五郎が縄は頼朝が手づから打つて遣はさう。

五郎（居直る。）こは思ひも掛けぬ仰ぢや。今生の思出に、さあ御縄を拜領致さう。

將軍（起つ。）わが打つ縄は不動の羂索、難伏のそちには、相應はしからう。いで〳〵。

（階を降らんとす。幕。）（鷗外全集）

八　天つ星

下河邊長流
大阪の國學者
貞享三年（一六八六）
歿
年六十三

釋契沖
國學者
大阪圓珠庵の住
僧
元祿十四年（一七〇一）歿
年六十二

しかま川
飾磨川
播磨國飾磨郡の
歌枕
戸田茂睡
歌人
江戸の人
寶永三年（一七〇六）
歿

天つ星

下河邊長流

天つ星おちて石ともならぬ間や、しばし川邊の螢なるらん。

釋契沖

富士のねに登りて見れば、天地は
まだいくほどもわかれざりけり。

戸田茂睡

梅の花おぼろ月夜ににほふなり、
常にもがもな、この頃にして。

野邊のつゆ山のしづくもしかま川、
海に出でてはかはらざりけり。

いにしへにあらすきかへせ、言の葉の
道はせまくもなりにけるかな。

ぬれてなく山ほとゝぎす、五月雨の
古巣やおもふ、親やこひしき。

荷田春滿

荷田春滿
國學者
山城稻荷山の祠
官
國學四大人の一
元文六年（一七三九）
歿
年六十九

賀茂眞淵
家號は縣居
國學四大人の一
遠江國濱松の人
明和六年（一七〇九）
歿
年七十三

をつくば
小筑波
あしほ
蘆穗
共に常陸の名山

ふみわけよ、大和にはあらぬ唐島の
あとを見るのみ人の道かは。

嵐ふく音もおよばぬ雲の上は、
いかに靜けく月のすむらん。

賀茂眞淵

をつくばも遠つあしほも霞むなり、
ねこし山こし春やきぬらん。

秋の夜のほがらく〜と天の原、

本居宣長
家號は鈴の屋
國學者
伊勢松坂の人
國學四大人の一
享和元年(一八〇一)
歿
年七十二

照る月かげに雁鳴きわたる。　本居宣長

日ぐらしに見ても折りてもかざしても
あかぬさくらをなほいかにせん。

加藤千蔭
家號は芳宜園
國學者
江戸の人
文化五年(一八〇八)
歿
年七十四

島山はつもるも見えずかきくれて
友ぶね白き雪のうなばら。　加藤千蔭

村田春海
國學者
江戸の人
文化八年(一八一一)
歿
年六十六

すみだ川蓑きてくだすいかだしに、
かすむあしたの雨をこそ知れ。

かはほりの飛びかふ軒は暮れそめて、
なほ暮れやらぬ夕顔のはな。　村田春海

小澤蘆庵
歌人
尾張に生れ京都
に住んだ
享和元年(一八〇一)
歿
年七十九

浅間山神のいぶきの霧はれて、
雲ゐに立てる夕けぶりかな。

雪降れば千里もちかし、おばしまの
もとよりつゞく富士のしば山。　小澤蘆庵

香川景樹
號は桂園
歌人
因幡鳥取に生れ
京都に住んだ
天保十四年(一八四三)
歿
年七十六

波となり小舟となりて、夕ぐれの
雲のすがたぞはては消えゆく。

里の犬の聲のみ空の月にすみて、
人はしづまる宇治の山かげ。

うぐひすのあかつきおきの初聲に
今はとしらむ春の夜の月。　香川景樹

筏おろす清瀧川のたぎつ瀨に
散りてながるゝ山吹のはな。

九 見知らぬ國

鶴見祐輔

鶴見祐輔
前鐵道省參事
明治十八年群馬縣生
安奉線
安東奉天間の鐵道
京奉鐵道
北京奉天間の鐵道

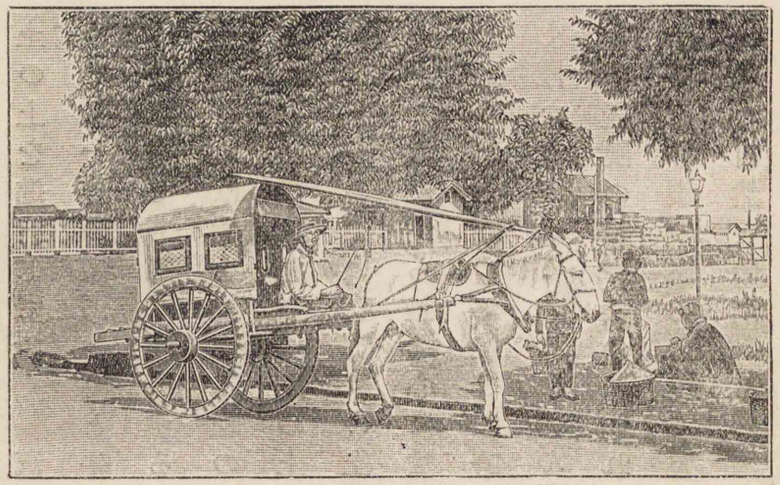
峻嶺雲に迫る朝鮮半島を縱斷し、安奉線を一睡の間に駛り拔けて、奉天で京奉鐵道の列車に乘換へた瞬間から、旅行者は其の身の支那大陸に在ることを痛感する。滿目の荒蕪が前後と、そして左右とに限なく續く。幾里かの無人の田畑を隔てゝ點在する村落の家々は、黃褐色の土で固めて、死んだ樣に黑ずんだ瓦を戴いて居る。楊の木のみが蒼々と茂つて、一道の生氣を此の籬落と平原とに與へて居る。見渡すかぎり赤土の平野の間に折折人の頭のみが見える。その頭は悠々と一定の速度を以て赤

三皇
太昊伏羲氏
炎帝神農氏
黃帝軒轅氏
五帝
少昊金天氏
顓頊高陽氏
帝嚳高辛氏
帝堯陶唐氏
帝舜有虞氏
哈爾賓
滿洲吉林省の都會
營口
滿洲奉天省遼河口の港

土の上を進行して行く。汽車の近づくに從つて、其の頭の前に連なる一群の驢馬と馬と牛との姿が見られる。それは低く陷つた道路である。修繕することなしに幾世紀の使用に任せた支那道路は、肩を沒する程の深さにへこんで居る。其の先祖の轍の刻んだ險惡な道路の上を、支那の農夫が三皇・五帝の昔ながらに、彈機の無い支那車の上に乘つて、種類の異なる五六頭の動物を御しながら無關心に駛つて行く。此の茫々たる平原の中に此の車を驅つて、彼等は哈爾賓から營口まで七百哩の道を、ごく僅かの賃銀で大豆を運んで來たのであつた。

其の無限の曠野、其の底知れぬ忍耐力、支那大陸の自然と人間とが不可思議の壓力を以て遊子の心魂に迫つて來る。纖麗なる日本の自然と怜悧なる日本の人間との環境を脫し來つて、一畫

クールヴァン Coulnvain (—1915)



滿洲風俗

夜にして、此の如く大なる自然と人間生活とを見れば、如何にして相互無關心に、相互不感染に存在しながら、三千年の國交を續けたのであらうかと疑はしくなる。

支那の環境と支那の文明とを、新しき心眼を開いて見ることの必要が沁々と遊子の胸臆に迫つて來る。佛蘭西の女流小說家クールヴァンは彼の女の英國紀行に題して「見知らぬ國」と言つた。廿二浬の海を隔てゝ二千年の親交

を結ぶ英國と佛蘭西とが互に「見知らぬ國」であつたならば、十二萬方哩の小國なる日本と四百萬方哩の大國なる支那との關係は、更により以上に「見知らぬ國」である。同文同種と言ふ抽象的な概念的な標語に累せられて、日支兩國民は、あまりに相知つたと自惚れ過ぎた。相似ざる隣人達が、異なる環境に異なる文明を抱いて生活しながら、相似たる者の如くに振舞つた。其の間から幾多の禍が渦卷き起つた。似ざる者の間に起る精神的反撥と物質的乖離とを一時の權宜と半呑半吐の好意とを以て繫ぎ合せようと、大勢の人々が騷ぎ犇めいた。其の焦燥と失望と憤懣との凡ての記錄の外に超然として、支那の農夫は昔ながらに五頭の動物を驅りつゝ、深さ丈餘にも及ぶ支那路の上を悠々と大豆を運んで行く。

停車場に車の駐まる度毎に、旅客はプラットフォームにおり立つて見馴れぬ光景を凝視する。四尺程の毛布の卷いたのを肩にして、黑ずんだ地の垢に穢れた着物を着、群集を押しのけ突飛ばしながら來るのは支那人の乘客である。耳も聾するばかり大聲に喚き立て怒鳴り立てゝやむこと無きは物賣である。未だ富を爲さゞりし幼年時代の紀文大盡が竹製蜻蛉を賣歩いた樣な恰好をして、小串の尖端に小さい白綿を着けたのを十幾本も藁の棒に刺して、ふらり〳〵と車窓の外を歩いて居る子供は、耳搔賣である。其の喧騷と雜沓と不統一との壓卷として、黑帽黃線の巡警がけろりかんと立つて居る。

車が山海關に着く時分には、初夏の陽はとつぷりと「天下第一關」の後に落ちて、秦皇の覇圖と現代支那の混沌とが遊子の心眼の

紀文大盡
紀國屋文左衛門
德川時代の富商
享保十九年(一七三四)歿
年六十六

山海關
支那直隸省の東端
萬里長城の起點

秦皇
秦の始皇帝

中にのみ甦つて來る。(思想・山水・人物)

一〇 萬里の長城

土井晩翠

生ける歷史か、積り來し　齡は高し二千年、
影は萬里の空に入る　名も長城の壁の上、
落日低く、雲淡く、　關山看す〳〵暮の色。
征馬悵みて、留りて、　遊子俯仰の影長う、
絕域花は稀ながら、　平蕪の綠今深し。
春乾坤に回りては、　空こと〴〵く霞み行く。
天地の色は老いずして、　人間の世はうつろふを
歌ふか、高く大空に、　姿は見えぬ夕雲雀。
嗚呼跡ふりぬ、人去りぬ、　歲は流れぬ、千載の

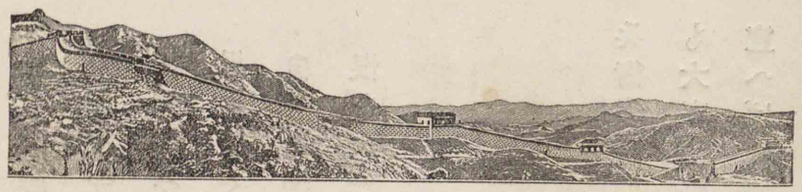
土井晩翠
名は林吉
詩人
英文學者
第二高等學校教授
明治四年仙臺市生

萬里の長城
支那の戰國時代に始めて築いたのを秦の始皇帝が七百餘里に增築した城壁

昔に返り、何の地か　今秦皇の覇圖を見ん。
殘壘破壁聲も無し。　恨も暗し、夕ぐれの
春朦朧のたゞ中に　俯仰の遊子影一つ。

邦は亡びて邦に嗣ぎ、　人は代りて人を追ふ。
鼎は移る朝二十、　歲は流るゝ曆二千。
中華幾たび烽あがり、　長城の壁越え來り、
又越え去りし蠻族の　數さへいかに、世々の跡。
山川影はかはらねど、　春夢空しく跡もなし。
群雄の覇圖いたづらに、　殘すはひとり史上の名。
獨り邊土に影絕えず、　齡重ねて二千歲、
殘壘苔に今靑む　長城の影尊しや。

西曆一千九百年
明治三十三年
北淸事變のあつた年
この詩は明治三十二年の作である



民の膏血、世の笑、　虐政の形見それながら、
歷史の色に染められて、　萬里の影ぞなつかしき。
其の面影に忍びでて　泣くは懷古の露のみか、
暮春の恨誰がために　霞も咽ぶ夕ぐれぞ。

霞も咽ぶ夕ぐれに、　遊子俯仰の物思。
北夷禦ぎし長城の　昔の跡はかはらねど、
時世空しく流れては、　中華の姿あすいかに。
秦・漢・魏・晉移り行く　昔の跡を引きかへて、
西の嵐の吹寄する　黃海の波今荒し。
西曆一千九百年、　東亞の嵐あすいかに。
中華の光、先王の　道、この民を救ひ得じ。

愛を四海に傳ふべき　　神人の教、いま空語。
俯仰古今の物思、　　遊子の恨いつ盡きん。
征馬悵みていなゝける　　響を返す壁のもと、
思も遠く眺むれば、　　霞たゞよふ大空の
自然の樂も絶果てつ。　　關山暮れて、星出でて、
恨を含む長城の　　姿は暗に呑まれ行く。

（晩鐘）

兵衛佐　前右兵衛權佐源頼朝
大庭　大庭三郎景親
俣野　俣野五郎景久
岡崎四郎　三浦介義明の弟

二　佐那田餘一

兵衛佐殿仰に、「武藏・相模に聞ゆる者どもは皆ありと覺ゆ。中にも大庭・俣野兄弟先陣と見えたり。此等に誰をか組ますべき。」と宣へば、岡崎四郎義實申しけるは、「弓矢を取つて戰場に出づる程

義忠　佐那田餘一義忠
岡崎四郎義實の子

の者、敵一人に組まぬ者やは侍るべき。親の身にて申す事、人の嘲を顧みざるに似たれども、存ずる所を申さゞらんも却て又私あるに似たるべし。義忠は此の間大事の所勞仕つて未だ力づかずや侍らめども、心しぶとき奴にて、弓矢取つては等倫に劣るべからず。其の器にはべり。仰せ含めらるべきか。」と申しければ、ばやかで義忠を召してけり。

餘一、其の日の裝束には、青地の錦の直垂に、赤縅の肩白の鎧の裾金物打つたるを着て、つま黑の箭負ひ、長覆輪の太刀を佩きけり。折烏帽子を引立て、弓を平め、跪きて將軍に平伏せり。白葦毛なる馬をぞ引かせたる。其の體、あたりを拂つてぞ見えし。兵衛佐、佐那田に宣ひけるは、「大庭・俣野は名ある奴原なり。今日の軍の先陣仕つて、彼等二人が間に組め。源氏の軍の手合なり、高名

せよ。」とぞ宣ひける。

餘一仰を蒙り、畏つて御前を立ち、郎等に文三家安と云ふ者を招き寄せて、「義忠が母又子どもが母にも語るべし。」とて云ひけるは、

『一昨日打出でしを最期と思ひ給ふべし。兵衛佐殿、今度の軍の先陣勤めよと直に仰せたびたれば、多くの人の中に擇ばれたる事、弓矢取る身の面目なり。されば命を限に戰はんずれば、生きて再び歸る事よもあらじ。豫て斯くと知り侍らば、何事も申し置くべかりけり。其の事今は力無し。我討たれぬと聞き給ひなば、母御前の御歎こそ思ひ殘し奉れ。縱ひ我死したりとも、世の靜まらん程は、二人の稚き者をば如何ならん野の末、山の奥にも隱し置きて、佐殿の世に立ち給うたらん時、先祖なれば岡崎と佐那田とをば申し賜はりて、兄弟に知らせてたび候へ。さては

岡崎と佐那田　共に神奈川縣中郡にある

女房も子供が後見しておはしませ。佛に花香進らせて、後の世弔ひ給へ。父岡崎殿も佐殿の御供なれば、軍の習生死を知らず、女性は何事か有るべきなれば、斯く申し置くなり。』と慥かに云ひ傳ふべし。又汝も稚き者ども不便に育て、世にあらば憑め、世になくば憫みて義忠が形見とも思へ。」など云ひければ、文三申しけるは、「殿の二歳の時より、家安親代となつて、夜は胸に抱へ奉つて夜もすがら勞り、晝は肩にのせ日ねもすに育み奉る。早く成人し給うて人に勝れ給はん事を願ひき。五六歳になり給ひしかば、竹の小弓に小竹矧の矢、的草鹿、とこそ射れ、かくこそ射れ、馬に乘つてはとこそ馳すれ、かくこそ馳すれと教へ育て奉りぬ。殿は今年二十五、家安五十七に罷り成る。若き人だに主命とて先陣を蒐けて死なんと宣ふ。殿を見捨てゝ家安が生きのこりて

は何かせん。又人の言はん事こそ恥かしけれ。『佐那田餘一の最期には恥ある郎等身に副はず。文三家安が如何程命を生きんとてか、最期の軍に主を捨てゝ逃げたりけん。』と申さんことも口惜し。死なば一所の討死なり、左樣の事をば誰にも仰せられよかし。」とて、三郎丸といふ童を招き寄せ、申し含めて遣はしけり。餘一既に打出でければ、佐殿は「義忠が裝束毛早に見ゆ。着替へよかし。」と宣へば、餘一は「弓矢取る身の晴振舞、軍場に過ぎたることは候まじ、尤も願ふ所に侍り。」とて、十五騎の勢を相具して進み出で て申しけるには、「源氏世を取り給ふべき軍の先陣承つて蒐出でたるを誰とか思ふ。音にも聞くらん、目にも見よ、三浦介義明の弟に本は三浦惡四郎、今は岡崎四郎義實、その嫡子に佐那田餘一義忠、生年二十五。我と思はん人々は組めや〳〵。」とて叫んで蒐く。弓手は海、馬手は山、暗さは暗し、雨は射に射て降る、道は狹し、馬にまかせてぞかけ行きける。

平家方より、「餘一は善き敵ぞ、餘すな。」とて進む者共には、大庭三郎景親、俣野五郎景久、長尾新五、新六、八木下五郎、漢楊五郎、荻野五郎、曾我太郎、原宗四郎、澁谷莊司、瀧口三郎、稻毛三郎、久下權頭、淺間三郎、廣瀨太郎、岡部六彌太、同彌次郎、熊谷次郎等を先として、兵七十三騎、佐那田一人に組まんとて我先に我先にと逸れども、暗さは暗し、道は狹し、馬次第にぞ打つたりける。

二十三日の黄昏時の事なれば、敵も味方も見え分かず。餘一は文三を呼んで、「家安慥かに聞け、我は柵構へて大庭、俣野が間に組まんと思ふなり。組む程ならば急ぎ落合ひて敵の首を取れ。此の間の勞りに力無く覺ゆれば、豫て云ふぞ。」と云ふ。文三「誰も

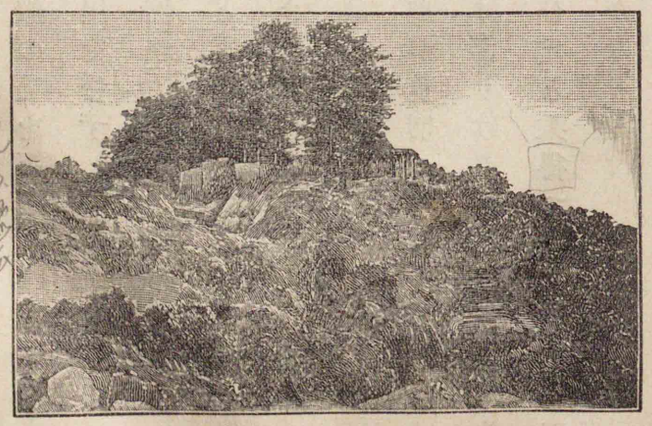
二十三日
治承四年（一八〇）
八月二十三日

さこそ存じ候へ。殿の大庭に組み給はゞ家安は俣野、我大庭に組み候はゞ殿は俣野に組み給へ」とて進む處に、岡部彌次郎、餘一に組まんと志して、鹿毛なる馬に乗つて馳來る。餘一は岡部とは思ひ寄らず、大庭か俣野かと思ひ、馳寄りて兜の天邊に手を打入れて、鞍の前輪に引付けて頸を搔き、取上げて雲透きに見れば、思ふ敵にはあらずして岡部彌次郎なり。「あな無慙や、鹿待つ處の狸とは此の事にや。何しに來つて義忠に打たるらん」とて、首を谷へぞ投入れける。餘一が乗つたる馬は、白葦毛太く逞しきが七寸に餘りて、鼻の先、瓠の花の如く白かりければ、名をば夕顔と云ふ。東國一の強馬なり。もと三浦介が許にありけるが、餘りに強くてたやすく乗る者無かりけるを、岡崎所望して乗りけるが、それも進退し煩ひたりけるに、餘一ばかりぞ乗從へたりける。されども岡崎持和げて三浦へ返したれば、本の栖處へ歸つたりとて、都返りと名づけたり。佐那田、折節馬無くて又乞返したれば、古巣へ歸つたりとて、鶯とも呼びけり。元來強き馬なりけれども、己が力を憑みつゝ、出雲轡の大きなるに手綱二筋差合せてぞ乗りたりける。岡部彌次郎が首切りける時、鎧武者の身の落つるに驚きて、つと出でて走り行く。さる者ぞと心得て、引留めんくとしけれども、此の馬の癖として、口をば主に打ちくれて胸にて走る馬なりけり。猶留めんと引く程に、手綱三つに切れければ、左右の水付執へたり。左右の水付引きもぎて、心の儘に引きて行く。大庭三郎は弟の俣野五郎に「構へて餘一に組み給へ、景親も目に懸らば組まんずるぞ」と云ふ。俣野は「餘りに暗くて敵も味方も

見えわかず、餘一も何處やらん。と云へば、「餘一が鎧は裾金物の殊にきらめきて、馬の毛も白かりき。白き幌を懸けたりつれば、著しかりつるなり。」と教ふ。俣野馳出でぬ。餘一馬に引かれて近づきたり。俣野敵の寄すると思ひければ、「佐那田餘一義忠と名乘りつるは落ちぬるか。」と呼びけり。無下に近かりければ、「義忠此處にあり。問ふは誰ぞ。」「俣野五郎景久。と名乘るや遲き、押並べて馬の間へ落重なる。上になり下になり、駈返し持返し、山の岨を下りに大道まで四段ばかりぞ轉びたる。今一返しも轉びなば、互に海へは入りなまし。俣野は大力と聞くに、如何したりけん下に推附けられてうつぶしに臥し、頭は下に、足は上に、起きん〳〵としたれども力無かりけり。餘一は上にひたと乘りえて、「義忠敵に組みけり、落重なれ、

四段
一段は六間か

落重なれ」と呼びたれども、家安を始として郎等ども押隔てられて續くものなし。俣野今は叶はじと思ひて、「景久、佐那田に組みたり。續けや〳〵。」と呼びけるに、長尾新五聲につきて落ちあひて、「上や敵、下や敵。」と問ふ。餘一は上に乘りながら、「斯く宣ふは長尾殿か。上ぞ景久、下ぞ餘一、過ちし給ふな。」と云ふ。俣野下にて、「上ぞ餘一、下ぞ景久、過ちすな。」と云ふ。頭は一所にあり、暗さは暗し、聲は息突きて分明に聞分かず。上よ下よと論じければ、思ひわびてぞ立つたりける。



佐那田餘一俣野五郎組打の遺蹟

俣野「あな不覺の殿や、聲にても聞知りなん。」と云ふ。長尾誠にと思ひて鎧の毛をぞ探りける。餘一顯れぬと思ひて、右の足を揚げて長尾をむずと蹈む。蹈まれて下りに弓長三杖ばかりとゞ走りて倒れにけり。その間に餘一刀を拔いて俣野が首を搔く。搔けども搔けども切れず、刺せども通らず。餘一刀を持揚げて雲透きに見れば、鞘卷の栗形缺けて、鞘ながら拔けたりけり。鞘尻くはへて、拔かん〳〵としけれども、運の極みの悲しさは、岡部彌次郎が首切つたりける刀を拭はず、鞘に差したれば、血詰りして拔けざりけり。長尾新五が弟に新六落合ひて、餘一が胡籙の間にひたと乘得て、兜の天邊を引仰けて頭を搔く、無慙といふもおろかなり。

俣野を引起して、「いかに手や負ひたる。」と問へば、「首こそ重く覺ゆ

栗形
下緒を通す處

れ。」といふ。顎を探ればぬれ〳〵とあり。手負うたるにこそと、て、餘一が刀を見れば、鞘尻一寸ばかり碎けたり。強く刺したりと覺えたり。その後俣野は軍はせず、「佐那田餘一は俣野五郎止めたり。」と叫びければ、源氏方には惜みけり、平家方にはこれを悅びけり。（源平盛衰記）

二二　佐藤嗣信

中にも後藤兵衛實基は古兵にてありければ、磯の軍をばせず、先づ內裏へ亂れ入り、手々に火を放つて、片時の煙と燒き拂ふ。大臣殿、侍どもに「源氏が勢は如何程あるぞ。」と問ひたまへば、「七八十騎にはよも過ぎ給はじ。」「あな心憂や、髮の筋を一筋づつ分けて取るとも、この勢には足るまじかりつるものを、中にも取籠めて

內裏
屋島の行宮
本文は壽永四年二月十八日讃岐屋島の合戰の時の事
大臣殿
內大臣平宗盛

能登
能登守平教經

伊勢三郎
義盛

清和天皇
貞純親王
源經基
滿仲—頼信
頼義—義家
爲義—義朝
頼朝
義經

討たずして、あわてゝ船に乘つて、內裏を燒かせぬることこそ口惜しけれ。能登はおはせぬか。陸に上つて一軍し給へかし。」と宣へば、「承り候。」とて、越中次郎兵衞盛嗣を先として、都合五百餘人、小船に乘り、燒き拂つたる總門の前の汀に押寄せて、陣を取る。判官も八十餘騎矢比に寄せて控へたり。

平家の方より越中次郎兵衞船の屋形に進み出で、大音聲をあげて、抑、以前名乘り給ひつるとは聞きつれども、海上遙かに隔つて、その假名實名分明ならず。今日の源氏の大將軍は誰人にてましますぞ。名乘り給へ。」といひければ、伊勢三郎進み出でて、「あな、事もおろかや。清和天皇十代の後胤、鎌倉殿の御弟、大夫判官殿ぞかし。」盛嗣聞いて、「さる事あり。去んぬる平治の合戰に、父討たれて孤にてありしが、鞍馬のちごして、後には金商人の所從となり、粮料背負うて奧の方へ落ち下りし、その小冠者めがことか。」とぞいひける。義盛歩ませ寄つて、「舌の柔かなるまゝに、君の御事な申しそ。さいふわ人どもこそ、北陸道にさまよひ、乞食して上つたりしその人か。」き命生きつゝ北陸道にさまよひ、乞食して上つたりしその人か。」とぞいひける。盛嗣重ねて、「君の御恩に飽き充ちて何の不足あつてか乞食をばすべき。さいふわ人どもこそ、伊勢國鈴鹿山にて山だちし、妻子をもはぐくみ、わが身も所從も過ぎけるとは聞きしか。」といひければ、金子十郎進み出でて、「詮ない殿原の雜言かな。われも人もそら言いひつけ、雜言せんに、誰かは劣るべき。去年の春攝津國一谷にて、武藏相模の若殿原の手並の程をば見てんものを。」といふ處に、弟の與一側にありけるが、いはせも果てず、十二束三伏取つてつがひ、よつ引いてひようと放つ。次郎兵

礪波山
一名栗殼嶽
富山縣礪波郡の西端加賀との境に峙つ

鈴鹿山
伊勢と近江との境に峙つ山

山だち
山賊

金子十郎
名は家忠

唐卷染
絞り染
唐は美稱

たかうすべうの矢
鷲の尾羽の中黑の斑のあるので作つた矢

佐藤嗣信の最期

衞が鎧の胸板に、うらかくほどにぞ立つたりける。

さてこそ互の詞戰は止みにけれ。

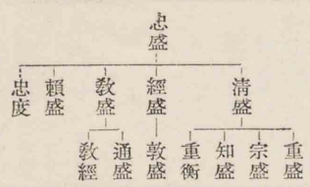
能登殿、「船軍はやうあるものぞ。」とて、鎧直垂をば着たまはず、唐卷染の小袖に唐綾縅の鎧着て、いかものづくりの太刀を佩き、二十四差いたるたかうすべうの矢負ひ、滋籐の弓を持ちたまへり。王城一の强弓精兵なりければ、能登殿の矢先にまはるもの、一人も射落されずといふことなし。

中にも源氏の大將九郎義經を、只一矢に射落さんと狙はれけれども、源氏の方にても心得て、伊勢三郎義盛・奥州の佐藤三郎兵衞嗣信・同じき四郎兵衞忠信・江田源三・熊井太郎・武藏坊辨慶などいふ一人當千の兵ども、馬の頭を一面に並べて、大將軍の矢表に馳せ塞りければ、能登殿も力及び給はず。能登殿「そこのき候へ、矢面の雜人原。」とて、さしつめ引きつめ散々に射給へば、矢庭に鎧武者十騎ばかり射落さる。

中にも眞先に進んだる奥州の佐藤三郎兵衞嗣信は、弓手の肩より馬手の脇へ、つと射拔かれて、暫しもたまらず馬よりさかさまにどうと落つ。能登殿の童に菊王丸といふ大力（だいぢから）の剛の者、萌黃

三枚兜　鍬の三枚ある兜

犬居　犬が蹲つた様に手をつくこと



縅の腹卷に、三枚兜の緒をしめ、打物の鞘をはづいて、嗣信が首を取らんと飛んでかゝるを、忠信側にありけるが、兄が首を取らせじと、よつ引いてひようと放つ。菊王丸が草摺のはづれをあなたへつと射ぬかれて、犬居に倒れぬ。能登殿これを見給ひて、左の手には弓を持ちながら、右の手にて菊王丸をつかんで、船へからりと投げ入れたまふ。敵に首を取られねども、痛手なれば死にけり。

この童と申すは、もとは越前三位通盛卿の童なり。然るを三位討たれたまひて後、弟能登殿にぞ使はれける。生年十八歳とぞ聞えし。能登殿この童を討たせて餘りにあはれに思はれければ、その後は戰をもしたまはず。

判官は嗣信を陣の後へかき入れさせ、急ぎ馬より飛んで下り、手を取つて、「如何覺ゆる、三郎兵衛。」と宣へば、「今はかうにこそ候へ。「この世に思ひ置く事はなきか。」と宣へば、別に何事をか思ひ置くべき。さは候へども、君の御世にわたらせ給ふを見參らせずして死に候こそ心にかゝり候へ。さ候はでは、弓矢取は敵の矢に當つて死ぬること、もとより期する所でこそ候へ。就中源平の御合戰に、奥州の佐藤三郎兵衛嗣信といひけん者、讃岐國屋島の磯にて、主の御命に代つて討たれたりなど、末代までの物語に申されんこそ、今生の面目、冥土の思出にて候へ。」とて、只弱りにぞ弱りける。

判官は猛き武士なれども、餘りに哀に思ひ給ひて、鎧の袖を顔に押當てゝ、さめ〴〵とぞ泣かれける。「若しこの邊に尊き僧やある。」とて尋ね出でさせ、手負の、只今死に候に、一日經書いて弔ひ給

五位尉　元暦二年九月檢非違使判官義經は從五位下に敍せられた

へ。」とて、黑き馬の太う逞しきに好い鞍置いて、かの僧にぞ賜びにける。この馬は判官五位尉になられし時、是をも五位になして大夫黑と呼ばれし馬なり。一ノ谷のうしろ鵯越をもこの馬にて落されける。弟忠信を始めとしてこれを見る侍ども、皆涙を流して、「この君の御爲に命を失はんことは全く露塵程も惜しからず。」とぞ申しける。（平家物語）

一三　忘れ難き日

姉崎嘲風　名は正治　宗教學者　文學博士　東京帝國大學教授　明治五年京都生

友　高山樗牛

嗚呼、忘れ難き此の日かな。思へばはや五年の昔、春光麗かに南風薫ずる日、友に擁せられて家を辭し、故國に別れしは恰も今日の此の日なりき。帽を振れる客、巾を翻せる友、船上・艇中相隔りては面も定かならず、姿も終には見分かぬ迄に消え失せぬ。「健在なれ。」「再び早く相見ん。」との別の言葉は尙耳に響き、最後の握手今尙掌に感ぜられつゝも、見わたせば白鷗飛びかふ海の面渺として、埠頭の家屋、故國の山河、已に霞の中に入りにき。嗚呼、かくて相別れたる我が友今何處にかある。彼はその夜、西の方足柄を過ぎて清見潟のほとりにさすらひ來り、恰も此の海樓に宿りて離別の悶を遣りしなり。月は去り日は逝きて五年後の今日此の日、我は來りて此の海樓にあれど、彼は既に世を謝して復相見んに由なく、我をして孤影蕭然欄に憑りて無限の感に沈ましむ。

三月君が西航の首途を横濱に送りたる日、予は西の方函嶺を踰えて駿州に入り、清見潟の海樓に宿りて離別の悶を遣りたりき。其の夜月明かに星稀に、一灣の風光恍として夢の如し。

清見潟　靜岡縣庵原郡興津町の南海

三月　明治三十三年

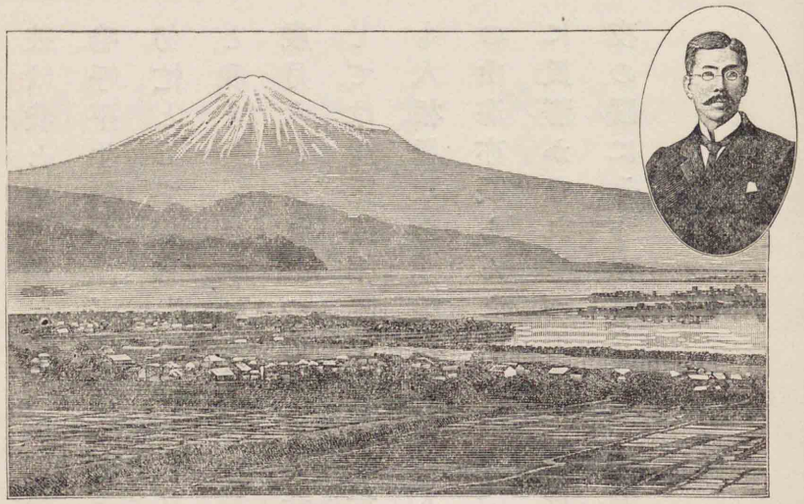
中宵欄に憑りて靜かに君を思ひ、うたゝ人生遭逢のはかなきを歎きぬ。

人生遭逢のいともはかなきを歎じたる彼、今や我を此の世に殘し、獨り我をして離合の泡沫に似たるを歎かしむ。見渡せば有渡の山、影かすかにして、袖師の松原、雨におぼろなり。彼が埋骨の地、彼が夢遊の山川、すべて暗澹の中に包まれて、海面亦死せるが如し。此の海、此の地、是、彼が久戀懷慕の處なりき。此の夜、此の風光、是、彼が銷魂の種たりしこと幾度ぞ。山海舊の如く、風光昔の儘にして、彼が友は已に歸り來つれど、彼と其の姿とは今や尋ぬるに由なし。昨は彼が墓邊の櫻花散りかゝる寒水石の碑を撫で、今夜、五年前の今日の別離を偲んで彼が遺文に對す。嗚呼、我此の流轉の世に處し、此の友なくして如何にしてか憂懷を

有渡の山　靜岡縣安倍郡久能山の別稱

袖師の松原　三保松原の一部

埋骨の地　靜岡縣安倍郡不二見村龍華寺



龍華寺から見た富士山

遣らん。

されど徒に憂ふるを已めよ。人に百歳の齡なく、世に別離なき人はあらじ。生死は世の常なり。別離は却て懷慕の樂みを深からしめ、懷慕は時と處との隔を越えて神相接せしむ。友こゝにあり、悠久の夜亦こゝにあり。彼が遺文餘薫新にして、我が思慕日毎に彼に通ず。

清見灣頭今宵雨しめやかにして夜靜かなり。形は見えねど

彼は我と語り、我は彼に接し、松風濤聲亦時に款晤に入り來る。嗚呼平生憂を同じうせる君と予と、先世何の契緣かある。身世匆忙として相移り、際遇已に相異なり、生死幽明相隔つと雖も、彼と我と長へに相伴はん。

歳月水と流れ去つて五年の昔を今に返す由なけれども、神相接しては生死路相隔てず。三世一心の中に融け來つては、彼も我も人相異ならず、靈相同じ。人里には燈火已に影を收め、清見潟の山海亦眠らんとす。雨よ降れ、夜よ暗かれ、有渡山下、友の墓邊に風靜かなれ。而して我は此處に我が友と相語りつゝ今宵一夜の眠に入らん。（停雲集）

一四　友に寄す

高山樗牛

友
京都帝國大學教授文學博士藤井健治郎
高山樗牛
名は林次郎
評論家
文學博士
山形縣鶴岡の生
明治三十五年歿
年三十二

如何佛暮〜なるまじきや世方お変らず
碌〜羅在の間餘事なぐら沛安心下され
たく我此頃も事に紛れ出無沙汰
打過ぎし毎度勝手の事のみ沛賴と
申上げ古面倒察入偏徒然の打にも
物ほ〜きすく色〜注文申上げへども實
際手にとるは稀よ古度水彩畫ふ
描きみんとて先頃繪具など取寄せ茫然

魚見崎　熱海町の南端にある岬
眞鶴崎　神奈川縣足柄下郡にある岬
熱海の東北三里餘

つゞも是まだ手に觸もずゝ顧られぬ我な
ぐらゝ住しくも暮しつるそれとのれと思もれゝ
つゞそれそれ日〳〵をなのくに樂〳〵く過し

中俤

小生の室は熱海中ゝて最も眺望よきゝ霧
にて魚見崎より眞鶴嵩まで縹渺の裏
よ華つまゝ朝日影さし入る頃に起き出でて
九時頃より濱邊など數歩致し午後は

ハイネ　Heine (1797—1856) 獨逸の詩人

囲碁大弓等に費もの毎日例よ牲時に
も一卷のハイネ集を携へて山腹の笹原
に仰臥し大海の浩蕩ゝ若して朗吟する
こゝも忘れゝ或ハ日暮の空ひとり磯邊乃
松に腰ゝ懸て夢ともなく現ともなき思
に耽ることもあれ俤だよや自然の無盡
藏なる今はた鶯かるゝ〳〵のりに古座形
我も人と自然ことと口にこゝは言へ我人か

其の真意を會得したるや天の響地の響思ひ見るだに高く深く侍べどもその感ぜる人の心は如何ばかり高く深きそれにかべきやうくゆ日影も名殘なく暮き果て漁火ほの見ゆる頃ふ相成候へばざんざくの波音のみ高く相成り水と空とも別も消えて天地を一つになるまらんと思はるゝころ夜は眠のたゞに造らまたるものにあらぜよ

笹川
笹川臨風
姉崎
姉崎嘲風
大橋
大橋乙羽
熊谷
熊谷五郎

一四　友に寄す

詩人社言葉の今更ふ思ひ出でられ侍
去年の暮より二三日前までは月色殊の外
めでたくあかず夜をふかして打眺め申候
元日の夜も十七夜なりしゆゑ月の海を出
づる頃ふ生の宿に笹川姉崎大橋熊谷の
諸氏と共よ觀月の小宴を張り申候ひき
一昨四日の夜九時頃まても候ひたん林そ
れのんとてはるゝぞ窓の間より海色をな

がめ居へば缺月ならぬ一間ずかの海と離れ
言ふばかりなくめでたき景色なれ共ひしかば下女に命じて兩戸をあけさせ欄ゆりてハイネを朗吟致居其時の心地よさあはれこのまま石にも金にもなれかしと思ひしひき

貴兄等ハさぞかしゝ日々勉學の出來ならんと羨ましく中居時ふゝ漢文賜ひ居へ

西田幾多郎
哲學者
文學博士
京都帝國大學名譽教授
明治元年石川縣生

東園
藤岡作太郎
國文學者
文學博士
東京帝國大學助教授
石川縣金澤市生
明治四十三年歿
年四十一

小田原
神奈川縣小田原町

し病氣も大方は宜しく候間御心配下さるまゝ御安心被下度候中上げたき事山々ありまづ〳〵これにて筆をとゞめ候

（稚牛全集）

一五　愛兒の死

西田幾多郎

三十七年の夏、東園君が家族を携へて歸鄉された時、君には光子といふ女の兒があつた。愛らしい生々した子であつたが、昨年の夏、君が小田原の寓居の中に意外にも此の子を喪はれたので、余は前年旅順で戰死した余の弟のことなど思ひ浮べて、力を盡

して君を慰めた。然るに何ぞ圖らん、今年の一月、余は漸く六つばかりになつた己が次女を死なせて、却て君から慰められる身となつた。

今年の春は、十年餘も帝都を踏まなかつた余が、思ひがけなくも或用事の爲に東京に出るやうになつた。着くや否や東圃君の宅に投じた。君と余とは中學時代以來の親友である、殊に今度は同じ悲みを抱きながら、久し振りで相見たのである、單にいつもの舊友に逢ふといふ心持のみではなかつた。然るに手紙では互に相慰め、慰められて居ながら、面と相向つては何の語も出ず、唯輕く弔辭を交換したまゝであつた。逗留七日、積る話はそれからそれと盡きなかつたが、遂に一言も亡兒の事に及ばなかつた。唯余の出立の朝、君は篋底を探つて一束の草稿を持來つて、「亡兒の終焉記だから。」といつて余に示された、かつ今度出版すべき文學史をば亡兒の記念としたいとのこと、及び余にも何か書添へてくれよといふことをも話された。君と余と相遇うて亡兒の事を話さなかつたのは、互にその事を忘れて居たのではない、又堪へ難い悲哀を更に思ひ起して、苦悶を新にするに忍びなかつたのでもない。誠といふものは言語に表はし得べきものではない。言語に表はし得べきものは平凡である、淺薄である、虚僞である。至誠は相見て相言ふ能はざる所に存するのである。我等の相對して相言ふ能はざりし所に、言語はおろか、涙にも現すことのできない深い同情の流が心の底から底へと通つて居たのである。

余も我が子を亡くした時に深い悲哀の念に堪へなかつた、特に

此の悲みが年と共に消えゆくかと思へば、いかにもあさましく、せめて後の思出にもと、死んだ子の面影を書殘した、而して直ちに之を東圃君に送つて一言を求めた。當時眞に余の心を知つてくれる人は君の外にないと思つたのである。然るに何ぞ圖らん、君は余よりも前に、同じ境遇に會うて、同じ事を企てられたのである。余は別れに臨んで君の送られたその兒の終焉記を行李の底に收めて歸つた。一夜眠られぬまゝに取出して詳かに讀んだ。讀み終つて、人心の誠はかくまでも同じものかとつくづく感じた。誰か人心には定法がないといふ、同じ盤上に、同じ球を、同じ方向に突けば、同一の行路を辿るやうに、余の心は君の心のやうに動いたのである。

回顧すれば、余の十四歳の頃であつた、余は幼時最も親しかつた

余の姉を喪つたことがある、余は其の時生來始めて死別のいかに悲しいかを知つた。余は亡姉を思ふの情に堪へず、また母の悲哀を見るに忍びず、人無き處に到つて思ふ儘に泣いた。幼心に、若し余が姉に代つて死に得るものならばと、心から思つたことを今も記憶してゐる。近くは三十七年の夏、悲慘な旅順の戰に、唯一人の弟は敵壘深く屍を委して、遺骨をも收め得なかつた有樣、こゝに再び舊時の悲哀を繰返して、斷腸の思が未だ全く消失せないのに、又己が愛兒の一人を喪ふやうになつた。骨肉の情いづれ疎かなるはないが、特に親子の情は格別である。余は此の度生來未だ曾て知らなかつた沈痛な經驗を得たのである。余はこの心から推して、一々君の心を讀むことが出來ると思ふ。君の亡くされたのは君の初子であつた、初子は親の愛を專らに

するが世の常である。特に幼い女の子はたまらぬ位に可愛いとのことである。情濃やかな君にして此の子を喪はれた時の感情はどんなであつたらう。亡き我が兒の可愛いといふのは何の理由もない、唯譯もなく可愛いのである。甘いものは甘い、辛いものは辛いといふの外にない。「これまでにして亡くしたのは惜しからう。」といつて、悔んでくれる人もある、併しかういふ意味で惜しいといふのではない。「女の子でよかつた。」とか、「外に子供もあるから。」などいつて、慰めてくれる人もある、併しかういふことで慰められようもない。ドストエフスキーが愛兒を喪つた時、「子

ドストエフスキー

ドストエフスキー
Dostoyevsky
(1821-1881)
ロシヤの小說家

ソニヤ
Sonia

供はまた生れるだらう。」といつて慰めた人があつた。氏は之に答へて、「どうして他の兒が愛されよう。私にいるのはソニヤだ。」といつたといふことがある。親の愛は實に純粹である、其の間一毫も利害得失の念を挾む餘地はない。唯亡兒の俤を思ひ出すにつれて、無限に懷かしく可愛さうで、どうにかして生きてゐてくれゝばよかつたと思ふのみである。若いものも、老いたものも、死ぬのは人生の常である、死んだのは我が子ばかりでないと思へば、理に於ては少しも悲しむべき所はない。併し人生の常事であつても、悲しいことは悲しい。飢渴は人間の自然であつても、飢渴は飢渴である。人は、「死んだ者はいかに言つても還らぬから、諦めよ、忘れよ。」といふ。併し、これが親に取つては堪へ難い苦痛である。時はすべての傷を癒すといふのは自然の惠

ワシントン、アーヴィング
Washington Irving (1813–1895) アメリカ合衆國の文學者
スケッチブック Sketch book アーヴィングの短篇集
死にし子云々をんな子のためには云々 共に紀貫之の「土佐日記」に見えてゐる。

であつて、一方より見れば大切なことかも知らぬが、一方より見れば人間の不人情である。何とかして忘れたくない、何か記念を殘してやりたい、せめて我が一生だけは思ひ出してやりたいといふのが親の誠である。昔、君と机を並べてワシントン、アーヴィングのスケッチブックを讀んだ時、「他の心の疵や苦みは、之を忘れ、之を癒したいとおもふが、獨り死別といふ心の疵は、人目をさけても之を溫め、之を抱きたいと思ふ。」といふやうな語があつた。今まことに此の語が思ひ合されるのである。折にふれ物に感じて思ひ出すのが、せめてもの慰藉である、死者に對しての心づくしである。この悲は苦痛といへば誠に苦痛であらう、併し親は此の苦痛を去りたいと思はないのである。「死にし子顏よかりき。」「をんな子のためには親をさなくなりぬ

カント
Immanuel Kant (1724–1804) 獨逸の大哲學者
スピリット Spirit 精神

べし。」など、古人もいつたやうに、親の愛はまことに愚痴である。冷靜に外より見たならば、たわいない愚痴と思はれるであらう。併し余はこの人間の愚痴といふものゝ中に、人情の味のあることを今度悟つた。カントがいつたやうに、物には皆値段がある。獨り人間は値段以上である、目的の者である。いかに貴重な物でも、そは唯人間の手段として貴いのである。世の中に人間ほど貴い者はない、物は之を償ふことが出來るが、いかにつまらぬ人間でも、一のスピリットは他の物を以て償ふことは出來ぬ。而してこの人間の絶對的價値といふことが、己が子を喪つたやう

な場合に最も痛切に感ぜられるのである。ゲーテがその子を喪つた時、「死者を越えて」といつて仕事を續けたといふが、ゲーテにして此の語をなした心の中には、固より仰ぐべき偉大なものがあつたでもあらう。併し人間の仕事は、人情といふことを離れて外に目的があるのではない、學問も事業も、究竟の目的は人情の爲にするのである。而して人情といへば、たとひ小なりとはいへ、人情自然の美を忘れる者は、却てその性情の卑しいことを示すに過ぎない。「征馬不レ前人不レ語、金州城外立二斜陽一。」の句があつて、愈〻

ゲーテ
Johan Wolfgang von Goethe
(1749–1832)
獨逸の大詩人

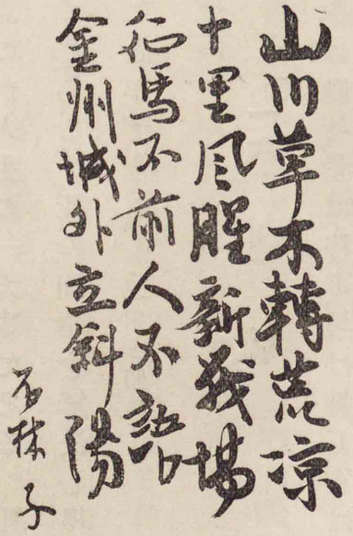
乃木希典

親が子を思ふより痛切なものはなからう。徒らに高く構へて

乃木將軍の人格が仰がれるのである。

とにかく、余は今度我が子の果敢ない死といふことによつて、多大の教訓を得た。名利を思つて煩悶の絶間のない心の上に、一杓の冷水を浴びせかけられた樣な心持がして、一種の涼味を感ずると共に、心の奥から秋の日の樣な清く溫い光が照して、すべての人の上に純潔な愛を感ずることが出來た。特に深く我が心を動かしたのは、今まで愛らしく話したり、歌つたり、遊んだりしてゐた者が忽ち消えて壺中の白骨となるといふのは、如何なる譯であらうか。若し人生

筆蹟
山川草木轉〻荒涼。十里風腥新戰場。征馬不レ前人不レ語。金州城外立二斜陽一。
石林子



乃木希典筆蹟

はこれまでのものであるといふならば、人生ほどつまらぬものはない。此處には深い意味がなくてはならぬ。人間の靈的生命はかくも無意義のものではない。死の問題を解決するといふのが人生の一大事である。死の事實の前には生は泡沫の如くである。死の問題を解決し得て、始めて眞に生の意義を悟ることができる。（思索と體驗）

鹽原　栃木縣鹽谷郡鹽原溫泉
尾崎紅葉　名は德太郎　小說家　江戸生　明治三十六年歿　年三十七
西那須野の驛　栃木縣那須郡太田原の西にある奥羽線の停車場
那須野が原　栃木縣那須郡三島村及び太田原から磐城の國境に至るまでの大原野

一六　鹽原

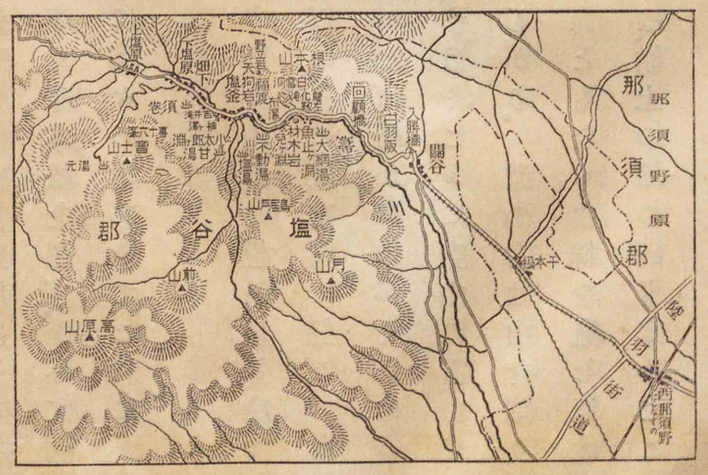
尾崎紅葉

車は馳せ、景は移り、境は轉じ、客は改れど、我は易からざるその悒鬱を抱きて、やるかたなき五時間のひとりに倦疲れつゝ、はじめて西那須野の驛に下車せり。直ちに西北に向ひて、今なほ茫々たる古の那須野が原に入れば、天は濶く、地は遐かに、たゞ平蕪迷ひ、斷雲飛ぶのみにして、三里の坦途、一帶の重巒、鹽原はそこぞと見えて行くほどに、路は窮らず。漸く千本松を過ぎ、進みて關谷村に至れば、人家の盡くるところに淙々の響ありて、これにかゝれるを入勝橋となす。

輙ち橋を渡りて僅かに行けば、日光暗く、山厚く疊み、嵐氣冷かに、壑深く陷りて、いくめぐりせる九折の、後には密樹に聲々の鳥啼き、前には幽草步々の花を開き、愈〻登れば遙かに木がくれの音のみ聞えし流の水上は淺く見えて、すはやこゝに空山の雷、白光を放ちて崩れ落ちたるかとすさまじかり。道の右は山を削りて長壁となし、石幽に蘚碧うして、幾條ともなく白絲を亂し懸けたる細瀑小瀑の珊々として灑げるは、嶺上の松の調も定めてこの緒よりやと見すてがたし。

秋の鹽原

車を驅りて白羽坂を踰えてより回顧橋に三十尺の飛瀑をふみて、山中の景は始めて奇なり。これより行きて、道あれば水あり、水あれば必ず橋あり、全溪にして三十橋。山あれば巖あり、巖あれば必ず瀑あり、全嶺にして七十瀑。地あれば泉あり、泉あれば必ず熱あり、全村にして四十五湯。なほ數ふれば、十二勝、十六名所、七不思議、誰か一々探り得べき。



鹽原附近

抑〻鹽原の地形たる、鹽谷郡の南より群峰の間を分けて深く西北に入り、綿々として箒川の流に泝る片岨にして、到る處巉巖の水を夾まざるなきは、宛然青銅の藥研に瑠璃末を碎くに似たり。先づ大網の湯を過ぐれば、根本山・魚止瀧・左靱の嶮は古りて、白雲洞は朗かに、布瀑・瀧が鼻・材木岩・五色岩・船岩なんどと眺め行けば。鳥居戸、前山の翠、衣に染みて、福渡戸の里に入るなり。

途すがら前面の崖の處々に躑躅の殘り、山藤の懸れるが甚だ興ありと目留れば、又此の邊殊に谿淺く水澄みて、大いなる古鏡の沈めるが如く、深く蔽へる岸樹は陰々として眠るに似たり。車夫を顧み、處の名を問へば、不動澤といふ。

遙かに望めば、行路の雲間に塞がりて、咄々何等の物かと先づ驚かさるゝ屏風巖、地を拔く何百丈と見あぐる絶頂には、ばら〳〵

と松も危く立ちすくみ、幹竹割に割放ちたる斷面は半空より一文字に垂下して、岌々たるその勢、幾ど眺むる眼も留らず。「これこそ名にし負ふ天狗巖なれ。」と、はるかにも車夫は案内す。

足にまかせて彼の巖の頭上に聳ゆる邊に到れば、谿急に激折して、水これが爲に鼓怒し、咆哮し、噴薄激盪して、奔馬の亂れて競ふが如し。寛かに百人を立たしむべき大磐石、風雨に歳經る膚は死灰の色をなして、鱗も添はず、毛も生ひざれど、狀恐しげにうづくまりて、老木の蔭を負ひ、急湍の浪にひたりて、夜な〳〵天狗巖の魔風に誘はれて吼えもしぬべき怪しの物なり。「その昔蒲生氏郷此の處に野立せしことあるに因りて野立石と申す。」と、例の

蒲生氏郷
戰國時代の武將
會津（百萬石）の城主
文祿四年（一五九五）
薨
年四十

が説出す。

率ゐたる車に乘りて急ぐ。　甘湯澤・小太郎が淵など思ひやりつ

つ鹽釜の湯は早くも過ぎて、いつしか畑下戸の里に着きぬ。

一村十二戸、溫泉は五箇所に涌きて五軒の宿あり。こゝに清琴樓と呼べるは、南に方りて箒川の緩くめぐれる磧に臨めり。俯せば水石の粼々たるを見、仰げば西は富士・喜十六の翠巒と對して、清風座に滿ち、袖の澤を落ちくる流は二十丈の絶壁に懸りて素練を垂れたる如き吉井瀑となり、東北は山又山を重ねて、琅玕の玉簾ふかく、一望の下、丘壑の富を擅にし、林泉のおごりを窮めらるゝなど、またあるまじき別境なり。我はこの繪を看るごとき清穩の風景にあひて、かの途上嶮しき巖と激しき流との爲に幾度か魂飛び肉消して理む

尾崎紅葉筆蹟

筆蹟
打出てゝ見れは
雪あらす若菜つ
むへき　紅葉

る方なくかき亂されし胸のうちは、藹然として頓に和ぎ、恍然としてすべて忘れたり。

まことによくこそ我は來つれ。何ぞ來ることの甚だ遲かりし。山の麗しといふも壤の堆きのみ。川ののどけしといふも水の逝くに過ぎざるのみ。牢として拔くべからざるわが半生の痼疾はいかで壤と水との醫すべきものならんと齒牙にも懸けず侮りたりしおのれこそ、まづ侮らるべき愚かのものなれや。

見よ〳〵、木々の綠も、浮べる雲も、秀づる嶺も、流るゝ溪も、そばだつ巖も、吹きくる風も、日の光も、鷄の啼く音も、空の色も皆おのづから浮世のものならで、我はこゝに憂を忘れ、悲みを忘れ、苦みを忘れ、勞を忘れて、身はかの雲と輕く、心はこの水と淡し。希はくは今より此の如くにしてわが生を終へんかな。（紅葉全集）

夏目漱石
名は金之助
英文學者
創作家
東京の人
大正五年歿
年五十

一七　霧の倫敦

夏目漱石

昨夜は夜一夜、枕もとで、ぱちぱち〳〵いふ響を聞いた。これは近處にある大停車場のためである。この停車場には、一日のうちに、汽車が千幾つか集つて來る、それを細かに割付けて見ると、一分に一列車位づつ出入をする譯になる。其の各列車が、霧の深い時には、停車場間際へ來ると、何かの仕掛で、爆竹の樣な音を立てて相圖をする。信號の燈光は、青でも赤でも全く役に立たない程暗くなるからである。

寢臺を這下りて、北窓の日蔽を捲きあげて、そとを見下すと、そとは一面にぼうとしてゐる。下の庭は、芝生の底から、三方煉瓦の塀に圍はれた一間餘の高さに至るまで、何も見えない。たゞ空

ローン Lawn

ゴツック式 Gothic style

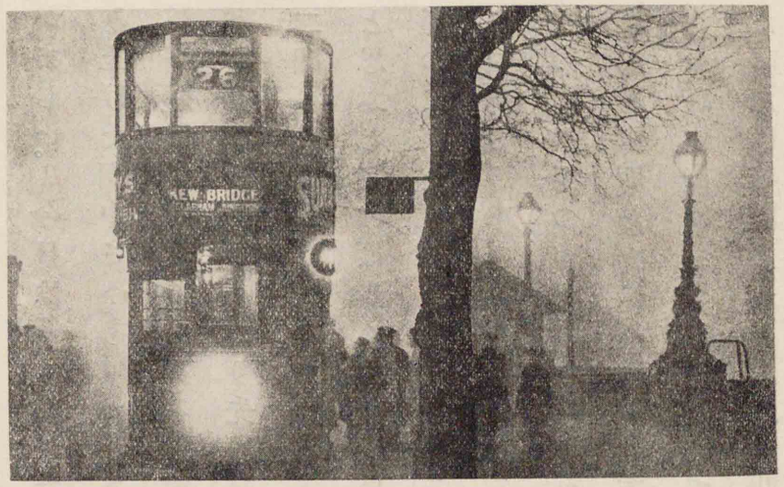
しいものが一杯詰つてゐる。さうしてそれがしんとして凍つてゐる。隣の庭も其の通りである。此の庭には綺麗な芝庭(ローン)があつて、春先の暖い時分になると、白い髯をはやしたお爺さんが、日向ぼつこをしに出て來る。このお爺さんは、何時でも、右の手に鸚鵡をとまらせてゐる。さうして自分の目を鸚鵡の嘴でつつかれさうな位に近く鳥の傍へ持つて行く。鸚鵡は羽搏きをして、しきりに鳴きたてる。お爺さんの出ない時は、娘が長い裾を曳いて、斷間なく芝刈器械を芝庭の上に轉がしてゐる。この庭も今は全く霧に埋まつて、荒れはてた自分の下宿の庭と何の境もなく、のべつに續いてゐる。

裏通を隔てゝ向側に高いゴシック式の教會の塔がある。その塔の、灰色に空を刺す時、天邊で、何時でも鐘が鳴る、日曜は殊にやかましい。今日は鋭く尖つた頂は無論のこと、切石を不揃に疊み上げた胴中さへ、ありかゞまるで分らない。それかと思ふ處が心持黑いやうでもあるが、鐘の音はまるで響かない。

表へ出ると、二間ばかり先は見える。その二間を行盡すと、また二間ばかり先は見えて來る。世の中が二間四方に縮まつたかと思ふと、歩けば歩く程新しい二間四方が現れる。その代り今通つて來た過去の世界は、通るに隨つて消えて行く。

四つ角で馬車を待合せてゐると、鼠色の空氣が切拔かれて、急に眼の前へ馬の首が出た。それだのに、馬車の屋根に居る人は、まだ霧を出切らずにゐる。此方から、霧を冒して飛乘つて下を見ると、馬の首はもうぼうとしてゐる。馬車が行違ふ時は、行逢つた時だけ、綺麗だなと思ふ。間もなく、色のあるものは濁つた空

ウエストミンスター橋 Westminster bridge



霧の倫敦

の中に消えて仕舞ふ。漠々として無色の裏に包まれて行く。ウエストミンスター橋を通る時、白い物が一二度眼を掠めて翻つた。眸を凝して其の行方を視詰めてゐると、封じ込められた大氣の裏に鷗が夢の様に微かに飛んでゐた。其の時、頭の上で、大時計が嚴かに十時を打出した。仰ぐと、空の中で只音だけがする。

用事をすまして河沿の道を歩

いて來ると、今まで鼠色に見えた世界が、突然、四方からばつたり暮れた。泥炭を溶いて濃く身のまはりに流した様に、黑い色に染まつた重い霧が、目と口と鼻とに逼つて來た。外套は抑へられたかと思ふ程濕つてゐる。薄い葛湯を呼吸するばかりに氣息が詰る。足許は穴藏の底を踏むと同然である。

自分は、此の重苦しい茶褐色の中に、しばらく茫然と佇んだ。自分の傍を、人が大勢通る様な心持がするけれども、肩が觸れあはない限は、果して人が通つてゐるのかどうだか疑はしい。其の時、この濛々たる大海の一點が、豆位の大きさに、どんよりと黃色に見えた。自分はそれを目標に、四歩ばかり歩いた。すると、或店先の窓硝子の前へ顏が出た。店の中では瓦斯を點けて居る。中は比較的明かである。人は常の如くにして居る。自分はや

つと安心した。

こゝを通り過ぎて、手探りをしないばかりに、向ふの岡へ足を向けたが、岡の上には同じ樣な横町が幾筋も並行してゐる、青空の下でも紛れ易い。自分は、向つて左の二つ目を曲つた樣な氣がした。それから二町程、眞直に歩いた樣な心持がした。それから先はまるで分らなくなつた。暗い中にたつた一人立つて首を傾けた。右の方から靴の音が近寄つて來た。と思ふと、それが四五間手前まで來て止つた。それから段々遠退いて行く。仕舞には全く聞えなくなつた。後はしんとしてゐる。自分は又、暗い中にたつた一人立つて考へた。どうしたら下宿へ歸れるか知らん。（漱石全集）

北畠親房
吉野朝廷の忠臣
從一位准三后
正平九年（一三五四）
薨
年六十三
又の年
延元三年（一九八）
顯家卿
親房の長子
延元三年（一九八）
戰歿
年二十一
親王
義良親王
後御即位あつて
後村上天皇と申す
男山
山城國男山八幡宮
陸奥の皇子
義良親王

一八　吉野の宮

北畠親房

又の年戊寅の春二月、鎭守府大將軍顯家卿、また親王を先だて申し、かさねて打上る。海道の國々悉く平ぎぬ。伊勢・伊賀を經て大和に入り、奈良の京になん着きにける。それより處々の合戰、あまたゝび互に勝負ありしに、同じき五月、和泉の國にての戰に、時や至らざりけん、忠孝の道こゝにて極りにき。苔の下にも埋れぬものとては、たゞ徒に名をのみぞ留めてし。心憂き世にもあるかな。官軍なほ心を勵まして、男山に陣を取りて暫く合戰ありしかど、朝敵忍びて社壇を燒拂ひしより、事成らずして引退く。北國に在りし義貞も度々召されしかど上りあへず、させる事なくて空しくさへなりぬと聞えしかば、いふばかりなし。さてしも止むべきならずとて、陸奥の皇子又東へ向はしめたま

顯信
顯家の弟

内の海
霞浦

ふべき定めあり。左少將顯信朝臣中將に轉じ、從三位に敍せられ、陸奥介鎭守府將軍を兼ねて遣はさる。東國の官軍悉く彼の節度に從ふべき由を仰せらる。親王は儲の君に立たせ給ふべき旨申し聞かせたまふ。

七月の末つ方、伊勢に越えさせ給ひて、神宮に事の由を啓して御船の艤ひし、九月の初、纜を解かれしに、十日あまりの事にや、上總の地近くより、空の氣色おどろ〳〵しく海上荒くなりしかば、又伊豆の崎といふ方に漂はれしに、いとゞ波風夥しくなりて、數多の船行方知らずなりけるに、皇子の御船は障りなく伊勢の海に着かせ給ふ。顯信朝臣は元より御船に候ひけり。同じ風のまぎれに、東を指して、常陸の國なる内の海に着きたる船ありき。方々に漂ひし中に、この二つの船、同じ風にて東西に吹分けらる。

舊都
京都
光明院おはす

末の世には珍らかなる例にぞあるべき。儲の君に定まらせ給ひて、例なき鄙の御住居も如何と覺えしに、皇大神のとゞめ申さしめ給ひけるなるべし。後に吉野に入らせまし〳〵て、御目の前にて天位を嗣がせ給ひしかば、いとゞ思ひ合せられて尊くもあるかな。又常陸はもとより志す方なれば、御志ある輩相計らひて、義兵こはくなりぬ。

さても舊都には、戊寅の年の冬改元して曆應とぞいひける。吉野の宮にはもとの延元の號なれば、國々も思ひ〳〵の年號なり。唐土にはかゝる例多かれど、此の國には例なし、されど四年にもなりぬるにや。大日本島根は固より皇都なり、内侍所・神璽も吉野におはしませば、いづくか都にあらざるべき。

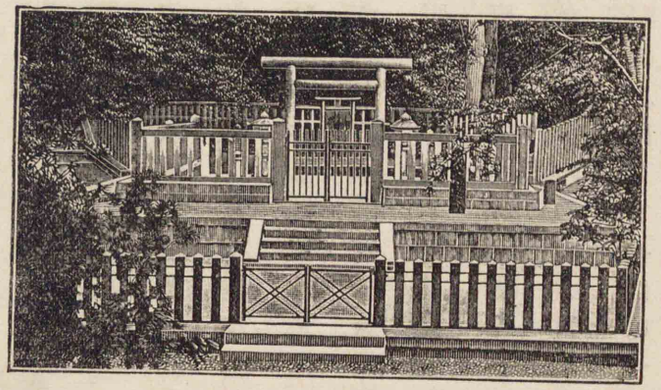
さても八月の十日餘り六日にや、秋霧に冒されさせ給ひて、かく

ぬるが内　ぬるがうちに見るをのみやは夢といはむはかなき世をも現とは見ず（壬生忠岑）

仲尼　孔子は春秋を筆削して筆を獲麟に絶つた

左大臣　關白左大臣藤原經忠

れましましぬとぞ聞えし。ぬるが内なる夢の世、今に始めぬ習とは知りながら、かず〳〵目の前なる心地して、老の涙も乾きあへねば、筆の跡さへ滯りぬ。むかし仲尼は獲麟に筆を絶つとあれば、こゝにて止りたけれど、神皇正統の邪なるまじきことわりを申し述べて、素意の末をもあらはさまほしくて、強ひて記しつくるなり。かねて時をも悟らしめたまひけるにや、前の夜より親王をば左大臣の第に移し奉られて、三種の神器を傳へ申さる。後の號をば仰のまゝにて後醍醐



後醍醐天皇御陵

胎中天皇　應神天皇

今の帝　後村上天皇

天皇と申す。天下を治めたまふこと二十一年、五十二歳おましましき。

昔、仲哀天皇熊襲を攻めさせたまひし時、行宮にて神ざりましまして、胎中天皇の御代に定まりき。この君聖運まし〳〵しかば、百七十餘年中絶えにし一統の天下を知らせ給ひて、御目の前にて日嗣を定めさせ給ひぬ。功もなく德もなき盜人世に起りて、四年あまりが程宸襟を惱まし、御世を過させたまひぬれば、御怨念の末空しくありなんや。今の帝亦天照大神よりこの方の正統を受けまし〳〵ぬれば、この御光に爭ひ奉る者やはあるべき。なか〳〵かくて鎭まるべき時の運とぞ覺ゆる。（神皇正統記）

渡邊の橋　今の大阪市天滿天神兩橋の間にあつたといふ
霜月　正平二年(一三〇七)十一月
この時楠木正行は山名時氏を攻めて打破り細川顯氏も續いて敗走した
阿部野　攝津國天王寺から住吉までの野今は大阪市の內
兩度の合戰　河內國譽田林の戰と攝津國阿部野の戰
將軍　足利尊氏
左兵衞督　足利直義

一九　如意輪堂

阿部野の合戰は霜月二十六日の事なれば、渡邊の橋よりせき落されて流るゝ兵五百餘人、かひなき命を楠木に助けられて、河より引上げられたれども、秋の霜、肉を破り、曉の氷、膚に結びて、生くべしとも見えざりけるを、楠木情ある者なりければ、小袖を脫替へさせて身を溫め、藥を與へて創を療せしむ。此の如く四五日皆勞りて、馬に乘る者には馬を引き、物具失へる人には物具を着せて、色代してぞ送りける。されば敵ながらその情を感ずる人は、今日より後、心を通ぜんことを思ひ、その情を報ぜんとする人は、軈て彼の手に屬して、四條繩手の合戰に討死をぞしける。

さても今年兩度の合戰に、京勢無下に打負けて、畿內多く敵の爲に侵し奪はる。遠國亦蜂起しぬと告げければ、將軍・左兵衞督の

淀　山城國久世郡淀町
八幡　山城國綴喜郡八幡町　共に淀川の左岸にある町
討死　延元元年五月十七日

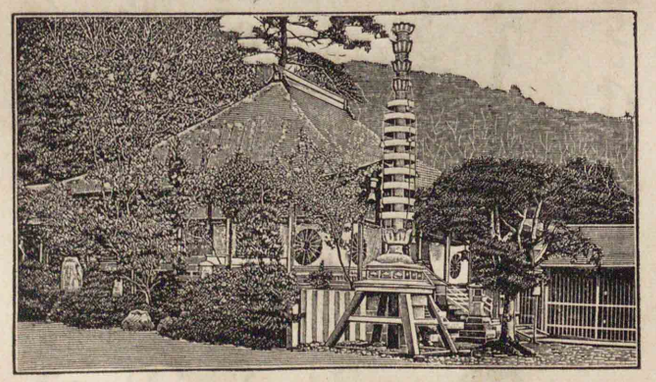
周章、只熱湯にて手を洗ふが如し。今は末々の源氏、國々の催し勢なんどを向けては叶ふべしとも覺えずとて、執事高武藏守師直・越後守師泰兄弟を兩大將にて、四國・中國・東山・東海二十餘箇國の勢をぞ向けられける。

京勢雲霞の如く、淀・八幡に着きぬと聞えしかば、楠木帶刀正行・舍弟正時、一族打連れて、十二月二十七日吉野の皇居に參じ、四條中納言隆資を以て申しけるは、「父正成尪弱の身を以て大敵の威を碎き、先朝の宸襟を休めまゐらせ候ひし後、天下程なく亂れて、逆臣西國より攻上り候ひし間、危きを見て命を致す所、豫て思ひ定め候ひけるかに依つて、遂に攝州湊川にして討死仕り候ひ了んぬ。その時、正行十一歲に罷り成り候ひしを、合戰の場へは伴はで河內へ歸し、『死に殘り候はんずる一族を扶持し、朝敵を亡し、君

有待の身
凡夫無常の身

を御代に卽け參らせよ。』と申し置きて死にて候。然るに正行・正時已に壯年に及び候ひぬ。この度我と手を碎き合戰を仕り候はずば、且は亡父の申しゝ遺言に違ひ、且は武略の言甲斐なき謗に落つべく覺え候。有待の身思ふに任せぬ習にて、病に犯されて早世仕る事候ひなば、只君の御爲には不忠の身となり、父の爲には不孝の子となるべきにて候間、今度師直・師泰にかけ合ひ、身命を盡し合戰仕つて、彼等が頭を正行が手にかけて取り候か、正行・正時が首を彼等に取られ候か、その二つの中に戰の雌雄を決すべきにて候へば、今生にて今一度君の龍顏を拜し奉らん爲に參內仕つて候。と申しもあへず、涙を鎧の袖に懸けて、義心その氣色に顯れければ、傳奏未だ奏せざる先に、まづ直衣の袖をぞ濡されける。

主上乃ち南殿の御殿の御簾を高く捲かせて、玉顏殊に麗しく、諸卒を照臨あつて、正行を近く召して、「以前兩度の戰に勝つことを得て、敵軍の氣を屈せしむ。叡慮まづ憤を慰する條、累代の武功返す返すも神妙なり。大敵今勢を盡して向ふなれば、今度の合戰天下の安否たるべし。進退度に當り變化機に應ずる事は、勇士の心とする所なれば、今度の合戰命を下すべきにあらずといへども、進むべきを知つて進むは、時を失はざらんが爲なり、退くべきを見て



如意輪堂

筆蹟

鎮守社壇回祿事ニテアリシ殊以驚歎入候但神體不二燒失一火中ニ御坐候條末代之奇瑞言語道斷ハンテク候歟忝可レ經二奏聞一ヲ候恐々謹言

五月廿六日　正行花押

觀心寺々僧御中

退くは、後を全うせんが爲なり。朕汝を以て股肱とす。慎んで命を全うすべし。」と仰せ出されければ、正行頭を地に附け、とかくの勅答に及ばず、只之を最後の參内なりと思ひ定めて退出す。

正行・正時・和田新發意・舍弟新兵衛以下、今度の軍に一足も引かず、一處にて討死せんと約束したりける兵百四十三人、先皇の御廟に參りて、今度の軍難儀ならば討死仕るべき暇を申して、如意輪堂の壁板に、各〻名字を過去帳に書きつらねて、その奥に

かへらじとかねて思へば、梓弓
なき數にいる名をぞとゞむる。

と、一首の歌を書留め、逆修の爲と覺しくて、各〻鬢髮を切りて佛殿に投入れ、その日吉野を打出でて敵陣へとぞ向ひける。（太平記）

楠正行筆蹟（史徵盡賓）

元弘三年
後醍醐天皇の御代（一九九八）

源長年
名和長年

二〇　月の夜さむ

元弘三年九月十三日、三首の歌講ぜられし時、月前擣衣といふことを。

後醍醐天皇御製

聞きわびぬ、はつき長月ながき夜の、
月の夜さむにころもうつ聲。

元弘三年、隱岐國より忍びて出でさせ給ひける時、源長

船上山　鳥取縣東伯郡に峙つ山

年御迎へに參りて、船上山といふ處へなし奉りける程の忠ためしなかりし事などしるしおかせまし〳〵けるものゝ奥に書きそへさせ給ひけるとぞ。

忘れめや、よるべもなみの荒磯を
　御舟のうへにとめし心は。

百首の歌よませ給ひて、前大納言爲定の許へ遣はされける中に。

後村上天皇御製

あはれ、はや浪をさまりて、和歌の浦に
　みがける玉を拾ふ世もがな。

吉野の行宮にて人々に千首の歌めされし序に、山花といふ事をよませ給ひける。長慶天皇御製

わが宿とたのまずながら吉野山、
　花になれぬる春もいくとせ。

爲定　藤原氏　歌人　新千歳集の撰者

あづまの方に久しく侍りて、ひたすらものゝふの道にのみたづさはりつゝ、征東將軍の宣旨など下されしも思ひの外なるやうに覺えて、よみ侍りし。

中務卿宗良親王

思ひきや、手もふれざりし梓弓、
　おきふし我が身なれんものとは。

同じ頃、武藏國へうち越えて、籠手指原といふ處におりゐて、手分などし侍りし時、いさみあるべきよし、つはものどもに仰せ侍りしついでに思ひつゞけ侍りし。

君のため世のためなにか惜しからん、
　捨てゝかひあるいのちなりせば。

宗良親王　後醍醐天皇の皇子　新葉集の撰者

籠手指原　埼玉縣入間郡所澤町の西一里

新待賢門院
後醍醐天皇の中宮藤原廉子

文貞公
藤原師賢
吉野朝の忠臣

後醍醐天皇かくれさせ給ひて又の年の春、花を見てよませ給ひける。　新待賢門院

時しらぬなげきのもとに、如何にして、
かはらぬ色に花の咲くらん。

題しらず　文貞公

うれへあれば聞くことといとふわが身ともうれへあれば聞くことといとふわが身とも
知らでや、こゝにうぐひすの鳴く。

元弘元年八月、俄かに比叡山に行幸なりぬとて、彼の山に登りたりけるに、湖上の有明殊におもしろく侍りければ。

思ふ事なくてぞ見ましほのぐ〳〵と
有明の月の志賀のうら波。（新葉和歌集）

二一　煤はらひ

手の甲へ餅をうけとる煤はらひ。
轉寐の顏へ一册屋根にふき。
おさへればすゝき、はなせばきり〳〵す。
よつぴいてひようと放さぬ案山子かな。
本降になつて出てゆく雨やどり。
泣く〳〵も善い方をとる形見わけ。
毎夜出て、人をつかんで食ふ按摩。
清盛の醫者は、はだかで脈をとり。
芭蕉は飛びこみ、道風は飛びあがり。
おつかさん、また越すのかと孟子いひ。

飛びこみ
古池や蛙飛びこむ水の音
（芭蕉）

釣れますかなどと文王そばへより。

二二　雪前雪後

幸田露伴

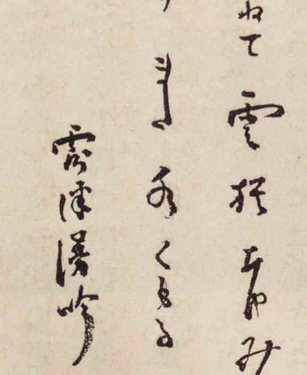
雨も好し、露も好し、霰も、霙も、天より降るものゝ面白からぬは無きが中に、雪はまた特にめでたし。降らんとして未だ降らず、灰色の雲の大空を蔽ひて風無き寒さに雀ふくらむ程は兎もあれ角もあれ、そと下す風に連れて、ちら〳〵と降出づる始より檐の玉水日に耀ふ光長閑に融けつくすまで、いづれかをかしからざらん。

まづ冬の雪の、粉の如く、球の如く、笹の葉に冴ゆる音立て、樫の葉に堅き音立て、板庇にはいたく跳ね返りなどしつゝさら〳〵と降りたる、見るにも興あり、聞くにも面白し。又春の雪の大きく

幸田露伴
名は成行
文學者
文學博士
慶應三年（一八六七）
江戸生

江上午景
山古りて樹重ね
て新に淺みどり
又深みどり風寢
ねて雲猶あゆみ
水光りまた水く
もる
露伴漫吟

輕らかに降りて落つる間もなく色なき水の昔にかへる淡々しさもなつかしく、消えつゝも少しは積りて、茅葺の屋根に鹿子斑の夏の富士を見せ、松・栂・樅などの梢には天華俄かに落ちかゝるかと疑はしむるも趣あり。



幸田露伴筆蹟

されど降る最中の雪の、見て美しきは、冬の末かけて春の初の頃、陽氣既に動きて陰氣猶いと盛なる時のことなり。寒さ甚だしからねば雪細かならず、暖かさ未だしければ雪は水めかずして恰も好く、且大きく且

輕やかなるに、しかも一年の中最も降るべき折なれば、その霏々紛々として盛に下るに當つては、櫻花の春天に飜るが如く、蘆絮の秋風に漂ふが如く、一江の野渡には、對岸を虛無に封じて仙境の縹緲を欺き、半衢の陋街には、連屋を瓊瑤に包んで蜃樓の巍峨を疑はしむ。鶴毛亂れ飛び、鷺毳飄り零つる景色、見る眼もあやに美しき限なり。

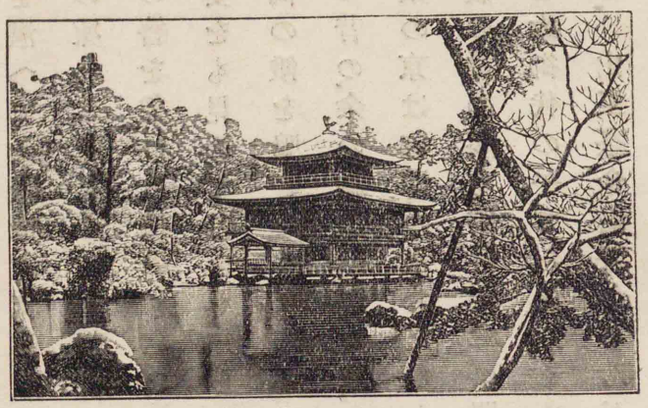
すべて降る時の眺には、廣きところより狹きところ好し。玉屑珠塵いと清きことは清けれども、もと色を奪ひ光を障ふるものなれば、降りしきる眞中は、遠きは全く見えずして廣きは却て狹くなり、近きは聊か霞みて狹きは却て廣くなり、大川よりは山間の溪、廣野よりは市中の園よろし。

霽れての後こそ雪は目ざましけれ。塵埃拭ひ盡して鏡新に明

馬をさへ
馬をさへ眺むる雪のあしたかな（芭蕉）

栂尾
槇尾
共に山城國葛野郡にある紅葉の名所
高尾と合せて三尾といふ

かなる空の蒼々と朗かなるが下に、渣滓錬り去つて銀曇なき地の皎々と白きが、見る眼もはゆく遙かに開けたる、常の日はたゞ裾野の取りどころ無きだに、面白くおもはる。「馬をさへ眺むる」と人の云ひたる旦、朝日の光いと花やかなるに、疎林に禽起つて飛んで寒き風の枯草を吹くのみなる空雪



金閣寺

また還る、有りふれたる郊外のさまながらもよし。

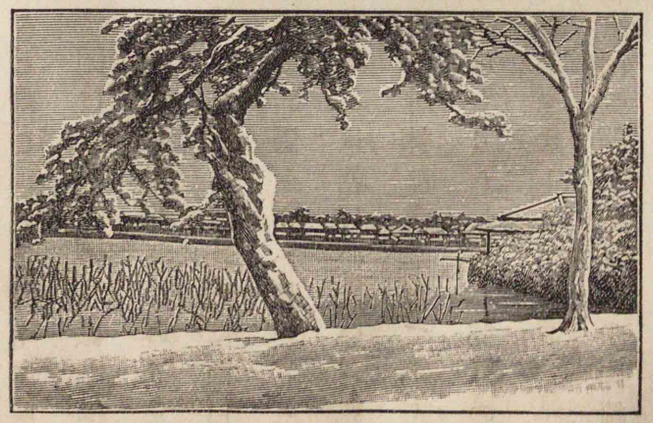
西の京は金閣・銀閣・眞如堂・岡崎・東山・清水皆畫とすべし。栂尾・槇尾は見ねば知らぬぞ口惜しき。

木曾の寢覺の床の、巖は鬼斧に任せて千古冷かに峙ち、潭は藍靛を湛へて一脈徐に流るゝ雪の日の凍れる寂しさに、翠蓋梢重く、璧の簪を戴ける松の村立のあたり、姿をも見せで名をも知らぬ山の禽の餓を鳴きたるなんど、二十年の昔の、余の胸に鮮かなり。

東の京は御溝の水おだやかに、浮寢の禽の夢も安けく、雪に閑かなる大御代の午、また比無くめでたし。山王臺今猶好からんが、溜池の有りし昔いたづらになつかし。

山王臺　麴町區にある小丘　日枝神社のある處

溜池　山王臺の東南麓にあつたが今は埋められて宅地になつた



冬の不忍池

不忍の池一望千頃の景はい

はずもあれ、石橋の小やかなるを渡つて湖心に至らんとすれば、敗荷の殘莖に一撮の白きものを見たる、これも捨て難き風情あり。暮れて猶暮れ難き雪の闇夜に、何をか物言ふ鴨のさゞめきを聞きたる、水に色無く、聲に白さ有りとや云ふべき。隅田川は待乳山を望みたるも好し。山に舞臺あり、臺より望みたるも好し。一條の碧、四方の白、實に武藏野を分きて流るゝ川なりといふべし。相生橋の橋長く、中島の島小なる、取出でて言ふべきにはあらねども、南に涯無き海をすかして海鷗も雪に曇る渺茫たる景色を、欄干の玉を展べ樹立の鷺を宿したるに劃りて一幅の畫としたる、欣ぶべく、賞すべく、此處をこそ今の京には雪の見どころとすべけれ。（洗心錄）

待乳山　隅田川の右岸淺草公園に近い丘

相生橋　深川區越中島から京橋區新佃島に渡した橋

中島　深川區越中島の一名

兼好法師　俗名吉田兼好　鎌倉室町時代の文學者　正平五年（一三五〇）寂　年六十九

仁和寺　京都市の西北郊御室にある眞言宗の寺

石清水　男山八幡宮　仁和寺の南五里

極樂寺・高良　共に男山の麓にある寺社

二三　仁和寺の法師

兼好法師

仁和寺にある法師、年よるまで石清水を拜まざりければ、心うく覺えて、ある時思ひ立ちて、たゞ一人かちより詣でけり。極樂寺・高良などを拜みて、かばかりと心得て歸りにけり。さて、かたへの人にあひて、「年頃思ひつること果し侍りぬ。聞きしにも過ぎて尊くこそおはしけれ。そも參りたる人ごとに山へ登りしは何事かありけん、ゆかしかりしかど、神へ參るこそ本意なれと思ひて山までは見ず」とぞ言ひける。少しの事にも、先達はあらまほしきことなり。

これも仁和寺の法師、わらはの法師にならんとする名殘とて各〻遊ぶ事ありけるに、醉ひて興に入るあまり、傍なる足鼎を取りて頭にかづきたれば、つまるやうにするを、鼻をおしひらめて、顏を

浮田一蕙筆（國華）

入れて舞出でたるに、滿座興に入ること限なし。

しばし奏でて後、拔かんとするに大かた拔かれず。酒宴ことさめて、いかゞはせんと惑ひけり。とかくすれば、首のまはりかけて、血垂り、たゞはれにはれみちて、息もつまりければ、打割らんとすれど、たやすく割れず、ひゞきて堪へ難かりければ、叶はで、すべきやうなくて、三足なる角の上に帷子をうちかけて、手を引き杖をつかせて、

京なるくすしがりゐて行きけり。道すがら人の怪しみ見ることと限なし。醫師のもとにさし入りて向ひ居たりけん有樣、さこそはことやうなりけめ。物を言ふも、くゞもり聲に響きて聞えず。「かゝることは書にも見えず、傳へたる敎もなし。」と言へば、又仁和寺に歸りて、親しきもの、老いたる母など枕がみに寄りゐて泣悲しめども、聞くらんとも覺えず。

かゝる程に或者のいふやう、「たとひ耳鼻こそきれうすとも、命ばかりはなどか生きざらん。たゞ力を立てゝ引きたまへ。」とて、藁のしべをまはりにさし入れて、かねを隔てゝ、首もちぎるばかり引きたるに、耳鼻缺けうげながら拔けにけり。辛き命まうけて久しくやみ居たりけり。（徒然草）

廣津和郎
文學者
明治二十四年東京生
ジャン、ヴァルジャン
佛國の文豪ユーゴーの傑作レ、ミゼラブル（哀史）の主人公

二四　僧正と賊

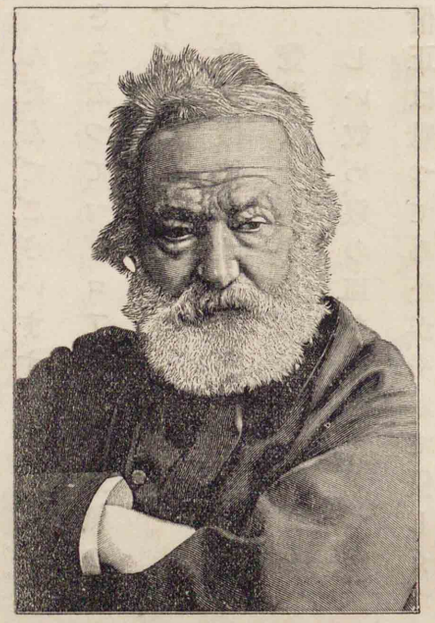
廣津和郎

深い靜けさが部屋を充してゐた。部屋の向ふの隅には眠つてゐるミリエル僧正の規則正しい、穩かな寢息が聞えた。ジャン、ヴァルジャンが僧正の寢臺の前に立止つた時、雲は心あるものの如く破れて、月光がさつと窓から射し込み、蒼ざめた僧正の寢顏を明るく照した。その顏は滿足と希望と幸福との漠然とした表情に輝いてゐた。それは微笑といふよりも、殆ど光輝に近いものであつた。額には眼に見えぬ光の名狀すべからざる反映が宿つてゐた。眠つてゐる正しき人の魂は、天の幻を見るものなのである。僧正の顏には何處となく神々しい處があつた。無意識の間に現れる莊嚴な處があつた。この輝かしい姿に、ジャン、ヴァルジャンは手に錐を持つたまゝ、身動きもせず、恐怖に

打たれながら佇んだ。今までこれに較べられるやうな何物も見た事がなかつた。で、老僧から眼を放す事が出來なかつた。ジャン、ヴァルジャンの樣子や面には不思議な不決斷なものがあつた。謂はゞ今彼は地獄と救との二つの國の間にためらつてゐたのである。この老僧の頭蓋骨を叩き割るか、それともその手に接吻するか、その何れを取るかに迷うてゐたのである。

間もなくそろ〳〵と左の手を額に當て、帽子を取り、それから同じくそろ〳〵と又その手を下して、そしてジャン、ヴァルジャンはじつと瞑想に沈んだ。帽子は左の手に、棍棒は右の手に、恐しい頭には髮の毛が逆立つてゐた。此の恐るべき光景の下に、僧正は尙も深き平和の眠をつゞけてゐた。

翌朝未明に僧正が庭を散歩してゐる處に、老女のマグロアールがあわてゝ駈けて來て、



「銀の皿の入れてある籠がありませんが、僧正樣は御存じですか。」

と訊いた。僧正は

「知つてゐる。」

と答へた。丁度花壇の上に落ちてゐる籠を見つけた處だつたので、それをマグロアールに渡して、

「そら、此處にある。」

と云つた。

「けれども、中には何も入つて居りませんよ。銀の皿はどうしたのでございませう」。

「あゝ、お前の探してゐるのは皿か。それぢや私は知らぬ」。

「まあ、それでは盗まれたんでございますよ。昨夜來た奴が盗んだんでございますよ」。

さう云つて、マグロアールは狂氣のやうに家の中に駈込んだが、すぐ又駈出して來て、

「僧正樣、彼奴は居りません。盗まれたんでございますよ。御覽遊ばせ、あすこに塀を乘越えた跡がございます。あゝ憎らしい奴め、銀の皿を盗みやがつた」。

僧正は默つてゐたが、やがて優しくマグロアールに向つて、

「マグロアールや、私があの銀の皿を持つてゐたのは私の間違

だつた。あれは貧しい人の所有に屬すべきものだつたのだ。昨夜の男はどうだらう。確かに貧しい人ではないか」。

「そんな事おつしやつても」。

とマグロアールは不服らしく、

「私のためでも、バプチスチン樣のためでもなく、あなた樣のお爲なんでございますよ。僧正樣、僧正樣はこれから何で御飯を召しあがります」。

僧正はびつくりしたやうな顏をして、

「どうして、錫の皿があるぢやないか」。

「錫は匂がします」。

「よし〳〵、それぢや鐵の皿」。

「鐵は味がつきます」。

バプチスチン　僧正の妹

「よし〳〵、それでは木の皿がいゝ。」

朝飯の濟んだ時、不思議な、恐しい群がおとづれて來た。三人の男が一人の男の頸をふん掴まへてゐた。三人の男は憲兵で、一人の男はジャン、ヴァルジャンであつた。

憲兵長が僧正の方へ進み出て、軍隊的の敬禮をして、

「閣下。」

と云つた。この言葉を聞くと共に、ジャン、ヴァルジャンは頭をもたげて、

「閣下だつて、それぢや牧師ぢやないのか。」

とつぶやいた。

「默れ。」

と一人の憲兵がどなつた。

「このお方は僧正閣下だ。」

「あゝ、又來ましたね。」

と、僧正はジャン、ヴァルジャンに向つて、

「お前さんに會ふのは喜ばしい。だが、私は燭臺も、二百法もする銀の燭臺も、お前さんに上げたはずだつたのに、どうしてあれを皿と一緒に持つて行かなかつたのです。」

ジャン、ヴァルジャンは眼をみはつて、何とも言ひやうのない表情をして僧正を見た。

「閣下。」

と憲兵長が口を挾んで、

「それではこの男の申立はほんたうだつたのでございますな。何だか逃げて行くやうな恰好をして居りましたから、取調べ

るために取押へましたら、銀の皿を持つて居りましたので。」

「それでわざ〳〵此處まで引張つて來られたのだね。それは大きな間違ですよ。皿は私がやつたのです。」

と、僧正がいつた。

「さういふ事でございましたら、放免してやりませう。」

憲兵たちは縮みあがつてジャン、ヴァルジャンを放免した。

するとジャン、ヴァルジャンはまるで寢言を云ふやうな、殆ど聞取れないくらゐの聲で、

「私を許してくれる。ほんたうだらうか。」

とつぶやいた。

「あゝもし〳〵、行きなさる前に、此處にお前さんの燭臺がある。これも持つてお出でなさい。」

と、僧正は二つの燭臺を取出してジャン、ヴァルジャンに渡した。

ジャン、ヴァルジャンの手足は顫へてゐた。さうして機械的にそれを受取つた。

「それでは靜かに氣をつけてお出で。それから序に言つて置きますが、今度此處に來る時には庭から來る必要はありませんよ。いつでも正面の戸口から出入り出來るやうになつてゐるからね。あすこは夜でも晝でも一寸懸金で閉めてあるだけだから。」

さう云つて今度は憲兵たちに向ひ、

「どうも御苦勞でした。」

憲兵達は引退つた。ジャン、ヴァルジャンはまるで氣が遠くなりさうだつた。僧正はその側に近づいて、低い聲で、

「忘れてはなりませんぞ。お前さんは此の銀の皿や燭臺を正直な人間になるために使ふと私に約束した事を、決して忘れてはなりませんぞ。」

ジャン、ヴァルジャンはそんな約束をした覺えはなかつたから、面喰つて立つてゐた。

僧正は嚴かに言葉をついで、

「ジャン、ヴァルジャン、私の兄弟、お前さんはもう惡には屬してはゐない、善に屬してゐるのですぞ。さあ私がお前さんの靈を購つたのだ。」

その日の夕方であつた。ダインの町から三里ばかり離れた野原の小徑を、十二ばかりの男の子が、腋の下に絞絃琴を抱へ、背中にモルモットの箱を擔いで、とぼ〳〵と歩いてゐた。旅から旅

Mormot モルモット

と渡り歩く子供藝人の一人であつた。何か嬉しさうに歌ひながら歩いて行くが、時々立止つて、恐らくはこの子供の全財産とも覺しき手の中の小錢をぱつと空に投上げては、面白さうに又それを受取るのであつた。その小錢の中には四十錢の銀貨が一個あつた。その中ひよつとしたはずみに、その四十錢の銀貨が手から滑り出て、道端の藪の方へ轉がつて行つた。

その藪の木蔭には、前から一人の男が休んでゐたが、銀貨が轉がつて來たのを見ると、足でそれを踏みつけた。けれどそれは殆ど無意識に踏んだのであつた。その男はジャン、ヴァルジャンであつた。子供はそれを見ても少しも恐れる氣色がなく、つかつかとジャン、ヴァルジャンの方へ進んで行つた。全く寂しい場所であつた。眼の屆く限、野原にも小徑にも人つ子一人ゐな

かつた。空を高く〳〵とんで行く渡鳥の群が微かに鳴いてゐる外、何の音も聞えなかつた。太陽はその方に背中を向けた子供の髪の毛を金絲のやうに輝かし、ジャン、ヴァルジャンの殘忍な顏を蒼白い光に照した。

「小父さん。」

と子供は罪のない顏をして、

「私のお金は。」

「お前の名は何ていふんだ。」

とジャン、ヴァルジャンは云つた。

「プチ、ゼルヴェーつてんだよ、小父さん。」

「彼方に行け。」

「小父さんてば。」

と子供は云ひつゞけて、

「お金を返しておくれよ。」

それでもジャン、ヴァルジャンが下をじつと向いて默つて考へてゐるものだから、子供はその頭に摑まつてゆすつた。そして金の上に載つて居る大きな鐵底の靴を動かさうとした。

「私銀貨が欲しいんだよ。四十錢の銀貨が。」

子供は遂に泣出した。

その泣聲にジャン、ヴァルジャンは頭を上げた。その顏には當惑したやうな色が浮んだ。で、不思議さうに子供を見てゐたが、やがてステッキの方に手を伸して、恐しい聲で怒鳴つた。

「お前は誰だ。」

「私は小父さんプチ、ゼルヴェーだよ。ねえどうぞ四十錢を返

しておくれ」。

さう云ひかけたが、子供は乍ちに腹を立てゝ、殆ど嚇すやうな調子で、

「さあ、お足をお退けよ。退けないかい」。

「何だ、まだゐやがる。氣をつけやがれ」。

子供はぞつと恐しくなつて來て、ジャン、ヴァルジャンを見つめたかと思ふと、全身をぶる〳〵顫はせて、やがてとつとゝ逃出した。後も振返らなければ、泣聲も立てなかつた。けれども遠くの方へ行つてから、息が切れたのか、立止つた。ジャン、ヴァルジャンはうつとりした心に、子供のすゝり泣くのを聞いた。

が、間もなく子供は往つてしまつた。

太陽は既に沈んでゐた。宵闇がジャン、ヴァルジャンの周圍を

籠めて來た。子供が往つてしまつてからも彼はさうしてじつと立つて、眼の前の地面を見つめてゐた。が、突然ぶるつと顫へた。冷たい寒氣が身にしみたのである。そこで帽子を眼深に冠り、服の襟を合せて、ボタンをかけて、側に置いてあつたステッキを取らうと、二三歩進み出ると、自分の足のために半分程地面に埋められて砂利の間に光つてゐる四十錢の銀貨がふと眼についた。

「これはどうした事だ」。

と齒の間で云つた。暫く立つてジャン、ヴァルジャンはその銀貨を拾つて、隠れ場所を求める怯ぢけた鹿のやうに顫へながら、眼を見張つて野原の四方を見渡した。何も見えなかつた。

夜が迫つて來た。野原は寒く寂寞としてゐた。紫の霧が、ちら

ちらする黄昏の中に昇りかけてゐた。

「おゝ。」

と云つてジャン、ヴァルジャンは子供の去つた方へ歩き出した。

「プチ、ゼルヴェー、プチ、ゼルヴェー」。

と聲を限に叫んで見たが、答はなかつた。

「プチ、ゼルヴェー、プチ、ゼルヴェー」。

そして終には駈出した。確かに子供はもう遠くの方へ行つてしまつたに違ひない。

馬に跨つてゐる一人の坊さんに出會つた。

「お坊さん、子供にお逢ひになりませんでしたか」。

と聞くと、

「いゝえ」

と坊さんは答へた。

「プチ、ゼルヴェーといふ名の子供なんですが」。

「私は誰にも逢ひませんでした」。

ジャン、ヴァルジャンは袋から五法の貨幣を二つ取出して、それを坊さんに渡して。

「お坊さん、これをどうか貧民に。……十歳ばかりの非常に小さい子供なんですが、慥かモルモットを持つてゐたと思ひます。それから絞絃琴を。この附近の村の者ではありますまいか」。

「お話の模樣だと、子供はどうも他國の者でせうな」。

ジャン、ヴァルジャンはもう二つ五法の貨幣を出して、

「これをどうか貧民に」。

と坊さんに渡したが、やがて荒々しく附加へて云つた。

「お坊さん、私を捕縛して下さい、私は泥棒です」。

坊さんは馬に拍車を當てゝ、恐れ戰いて逃出した。ジャン、ヴァルジャンは再び初の方向へ駈出した。

「プチ、ゼルヴェー」。

と幾度呼んだか解らない。けれどもその叫び聲は反響さへもなく霧の中へ消えて行つた。で、最後に又もや子供の名を呼んだ時には、聲が嗄れて殆ど聞きとれない程であつた。すると不意に、さながら眼に見えない力に撲たれたやうに、良心の苛責に堪へかねて、膝ががつくり利かなくなつた。彼は大きな石の上にぐつたりして倒れた。手は髪の毛を摑み、顏は膝に埋れて、そして

「俺は何といふ情ない男だらう。」

入道　平淸盛入道して淨海といふ

と呼んだ。

忽ち胸が塞がつて、わつと泣出した。これは十九年の間、彼が泣いた最初であつた。彼は泣いた。烈しく泣いた。長い間女よりも弱々しく、子供よりも恐れて、泣いてゐた。が、その中不思議な光が心の中に眼覺めて來た。そして何か知ら溫い思が込上げて來た。これは始めて生れ出た善の輝である。

その夜更けて、ミリエル僧正の戸口の前の敷石に跪いて、祈を捧げてゐる一人の男があつたのを、通りかゝつた驛馬車の御者が見たといふ事である。（ユーゴー物語）

二五　故郷の花

薩摩守忠度と申すは入道の舍弟なり。淀の川尻まで下りける

俊成卿
皇太后宮大夫藤原俊成

が、郎等六騎相具して、しのびて都へ歸り上る。如法夜半のことなるに五條三位俊成卿の宿所に行きて門を敲く。内にはこれを聞きけれども、かゝる亂れの世なる上、いぶせき夜半の事なれば、敲けども〳〵あけざりけり。餘りに強く敲きければ、やゝ久しくありて青侍を出し、戸を開かせずこれを問ふ。「忠度と申す者、見參に申し入れたき事ありて參りたり。」と答へければ、三位大庭に下り、世に恐れて内へは入れざりけれども、門をば細めにあけて對面あり。忠度のたまひけるは、「かゝる身として御爲憚あれども、所詮一門榮花盡きて都に安堵せず、西海に落ちくだりて侍り。亡びん事疑なし。世靜まりて後、定めて勅撰の沙汰候はんか。縱ひ身は八重の鹽路の底に沈むとも、藻鹽草かきおく末の言の葉後の世までも朽ちぬ形見に傳はり侍れかしと思ひ出

引合せ
鎧の胴の前と後とをひきしめあはせるところ

前途程遠
大江朝綱の作

でて、川尻よりしのび上りて侍り。これぞ年頃よみ集めたりし愚詠どもにて侍る。身と共に波の下に水屑となさん事遺恨に侍り。これを硎下に進め置き候ふ。勅撰の時は必ず思しめし出でよ。」とて、卷物一卷泣く〳〵鎧の引合せより取出でたり。三位感涙を流してこれを受取り、「御詠一卷預り置き候ひをはんぬ。これ永代秀逸の御形見、未來歌仙の指南たらんか。この匁劇の中に御音信に預る事、恐悦少なからず候かな。たとひ浮世を萬里の波に隔つとも、御形見をば一戸の窓にをさめて、勅撰の時は思ひ出で侍るべし。」とのたまへば、忠度、今は身を波の底に沈め、骨を山野に曝すとも思ふことなし。」とて、馬に乘り、古詩を

前途程遠、馳思於雁山之暮雲。
後會期無、霑纓於鴻臚之曉淚。

とうちあげ〳〵詠じつゝ、南を指してぞ落ちゆきける。本文には「後會期遙(カ)」と書きたるを、忠度還り見るべき旅ならず、今を限の別れなりと思ひければ、「後會期無」と詠じけるこそあはれなれ。

三位も殘りの惜しくして、遙かにこれを見送りても、あはれ世に在りしには、此の人どもにこそ諂ひ追從せしに、かはるならひとて、今は門を隔つることの悲しさよ。と、あはれなるにも涙、優なるにも涙、しのぶの袖をぞ絞られける。

世靜まりて後、千載集を撰まれけるに、忠度のこの道を嗜み、川尻より上りたりし志を思ひ出で給ひて、「故鄕の花」といふ題に、「よみ人知らず」とて、一首入れられたり。

さゝ波や、志賀の都は荒れにしを、
昔ながらの山ざくらかな。

ながらの山　長等の山　近江國滋賀郡三井寺の西に峙つ山

とよめる歌なり。名字をも顯し、數多も入れまほしかりけれども、朝敵となれる人のわざなれば、憚りたまひて、只一首ぞ入れられける。亡魂いかに嬉しく思ひけん。あはれにやさしくぞきこえし。　源平盛衰記)

二六　小枝(さだ)の笛

さる程に一谷の軍破れしかば、武藏國の住人熊谷次郎直實、「平家の公達の、助船に乘らんとて、汀の方へや落ちゆき給ふらん、あつぱれよき大將軍に組まばや。」と思ひ、細道に懸つて渚の方へ歩まする處に、玆に練貫に鶴縫うたる直垂に、萌黃匂の鎧着て、鍬形打つたる兜の緒をしめ、黃金作の太刀を佩き、二十四さいたる切斑(きりふ)の矢負ひ、滋籐の弓持ち、連錢蘆毛なる馬に、金覆輪の鞍置いて乘

一谷　神戸市の西部海岸にある源平の古戰場
練貫　經は生糸緯は練糸で織つた絹
萌黃匂　上は濃い萌黃色で下へいくほど白くぼかした織の色
鍬形　兜の前立てものの名
黃金作　黃金でつかやさやを裝飾したもの
切斑　鷹の羽の中は白く上下は黑いもの
滋籐の弓　五分おきに一寸幅に籐をまいた弓

連錢蘆毛　蘆毛に灰色の圓い錢をならべたやうな斑のある馬の毛色

金覆輪　金でふちをとつたもの

つたりける武者一騎、沖なる船に目をかけ、海へさつと打入れ、五六段ばかりぞ泳がせける。熊谷「あれはいかに。よき大將軍とこそ見まゐらせて候へ。まさなうも敵に後を見せ給ふものかな。返させ給へ、返させ給へ。」と扇をあげて招きければ、招かれて取つて返し、渚に打上らんとし給ふところに、熊谷浪打際にて押並べ、むずと組んでどうと落ち、取つて抑へて首

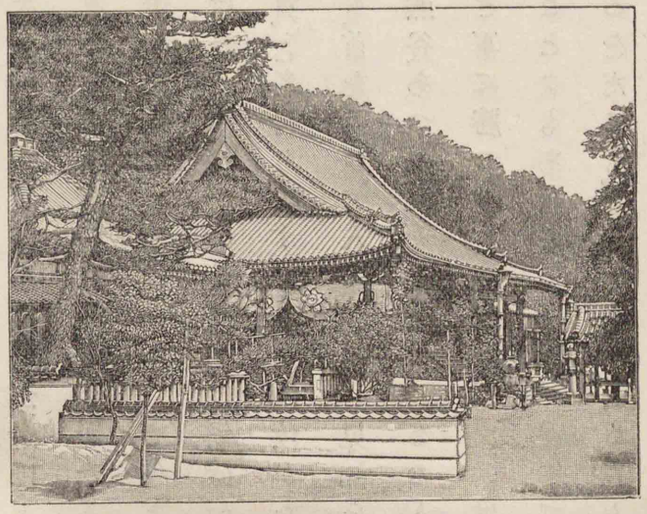
平敦盛（狩野牧心筆須磨寺藏）

小次郎　直實の長子直家

をかゝんとて兜をおしのけて見たりければ、薄化粧して鐵漿黑なり。わが子の小次郎が齡ほどして、十六七ばかりなるが、容顏まことに美麗なり。「抑、いかなる人にて渡らせ給ひ候やらん、名告らせ給へ。助けまゐらせん。」と申しければ、「まづ、かういふ和殿はたそ。」「物その數にては候はねども、武藏國の住人、熊谷次郎直實。」と名告り申す。「さては汝がためには好い敵ぞ。名告らずとも、首を取つて人に問へ。見知らうずるぞ。」と宣ひける。熊谷「あつぱれ大將軍や。この人一人討ち奉つたりとも、負くべき軍に勝つべき樣なし。又助け奉つたりとも、勝つ軍に負くることよもあらじ。今朝一谷にて、わが子の小次郎が薄手負うたるをだにも、直實は心苦しく思ふに、この殿討たれ給ひぬと聞き給ひて、さこそは歎き悲しみ給はんずらめ。助け參らせん。」とて、

土肥次郎實平
梶原平三景時

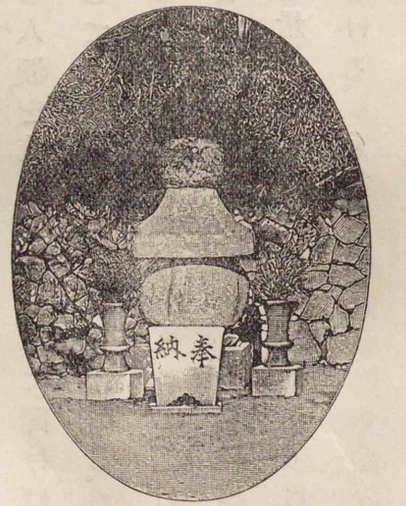
後を顧みたりければ、土肥・梶原、五十騎ばかりにて出で來る。熊谷涙をはら〳〵と流いて、「あれ御覽候へ。いかにもして助けまゐらせんとは存じ候へども、身方の軍兵雲霞の如くに充ち滿ちて、よも遁しまゐらせ候はじ。あはれ、同じうは直實が手にかけ奉つて、後の御供養をも仕り候はん。」と申しければ、「たゞ如何樣にも、とう〳〵首を取れ。」とぞ宣ひける。



須磨寺

熊谷、あまりにいとほしくて、いづくに刀を立つべしとも覺えず。目もくれ、心も消えはてゝ、前後不覺に覺えけれども、さてしもあるべき事ならねば、泣く〳〵首をぞ搔いてける。「あはれ、弓矢取る身ほど口惜しかりける事はなし。武藝の家に生れずば、何しに只今かゝる憂目をば見るべき。情なうも討ち奉つたるものかな。」と、袖を顏に押當てゝ、さめ〴〵とぞ泣き居たる。

首を包まんとて、鎧直垂を解いて見ければ、錦の袋に入れられたりける笛をぞ腰にさゝれたる。「あないとほし、この曉、城の内に



敦盛塚

て管絃し給ひつるは、この人々にておはしけり。當時身方に東國の勢何萬騎かあるらめども、軍の陣に笛持つ人はよもあらじ。上臈はなほも優しかりけるものを。」とて、これを取つて大將軍の御見參に入れたりければ、見る人涙を流しけり。後に聞けば、修理大夫經盛の乙子、大夫敦盛とて生年十七にぞなられける。これよりしてこそ熊谷が發心の心は出で來にけれ。件の笛は、祖父忠盛、笛の上手にて、鳥羽院より下し賜はられたりしを、經盛相傳せられたりしを、敦盛笛の器量たるによつて持たれたりけるとかや。名をば小枝とぞ申しける。（平家物語）

大將軍　源義經
經盛　平忠盛の子　清盛の弟

上田敏　英文學者　文學博士　京都帝國大學教授　大正五年歿　年四十三

二七　世界の歌枕

上田　敏

大西洋の浪は、太平洋のとは稍〻違つてゐる。太平洋の浪は大きく緩く打つ。大西洋のはいつも天氣が惡い爲か、稍〻小さく鋭い。空の色の關係もあらう、其の色は澄んだ藍ではなくて、稍〻黑ずんだ、時としては鉛のやうな色に見える。大西洋も緯度が稍〻高くなるに隨つて、浪の色が淡く、入日の華やかさは異ならぬが、夕雲の色彩も稍〻あつさりとして、南海の絢爛な色よりも却て美しい。

私の大浪に遭つたのは、桑港に着く三日程前の一日であつた。小山の如き浪が寄せ返るので、さしもの大船も木

桑港　San Francisco　サンフランシスコ　米國太平洋岸の港

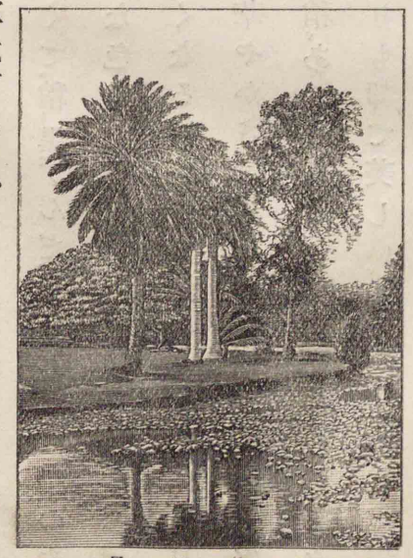
太平洋の激浪（犬吠崎沖）

の葉のやうに動搖したが、幸にも此の日は頗る上天氣で、風も無かつたので、甲板の上で其の壯觀を味はふ事が出來た。大西洋の方は、一體に山なす巨浪は少いが、米國を去つて六日目ぐらゐに、暴風雨に類した天氣に出遭つて、ひどく苦しめられた。

要するに、海の景色は取出でて人に語るといふことは難いが、後日に追想すると、單調のやうでも、其の美は千變萬化である。これ實に究竟の歌枕である。

布哇 Hawaii 大洋洲北部の群島

陸上の景色は、土地によつて著しい相違があつて、一般には言盡されぬ。布哇の如き、四時氣候を同じうして太平洋の樂園と稱



布哇風景

せらるゝ地に行くと、滿目の風光一變して、始めての人には非常に面白い。遠淺の海が極めて澄んだ萌黃の色に見えて、それに椰子の林が背景にあしらはれてゐる風情は、繪畫で見るよりも、實際の方がよほど美しい。これからの人が、歌枕の一つとすべき處だと思ふ。カピオラニーの公園に遊んだ時、蔚然たる榕樹の下に放し飼の孔雀が止つてゐて、其の艶な羽毛が花の樣であつたのを記憶する。又桑港の港近くなつた海上、數百羽の鷗が船に沿うて舞つてゐる處から遙かに眺めると、金門灣頭の大浪が港口に押寄せる有樣は、水の屏風を立て廻したごとく、海の上にも瀧があるかと疑はれた。これはた歌枕に逸すべからざるものと思ふ。

金門灣 Golden Gate 桑港の前にある長さ二里幅十四町ほどの灣

熱帶地方は言ふ迄も無いが、歐米の風光は、日本に比していたく

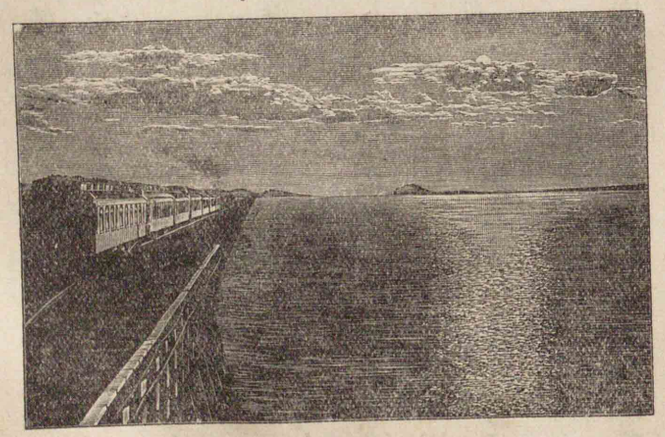
趣を異にしてゐる。彼の國には、我が國よりも草木が少い。見る山も見る山も日本のやうに松・杉が山全體を蔽うてはゐない。或は芝山の如く、或はたゞ岩石のみのやうな山の處々に、たまたま青々とした草木が十數本繁つてゐるといふ風の景色が多い。それで日本人は、動もすれば我が國の景に草木の多いのを誇稱するが、それは稍〻偏した見方であつて、兩方共にそれ〴〵の美しさがある。併しながら、その土地の極めて磽确であるのは、勿論景色が好いとは謂はれない。私の通過した米國の一部分は、殊に冬枯の候であつたから、人げのない、ものさびしい廣漠の野を行く心地がした。概して、あちらの木はひねくれてゐない。皆すうつと直立して、地面を離れた數尺の處から、四方に向つて枝が規則正しく手をひろげてゐる。かう規則正しくなつてゐる

ワイオミング Wyoming 米國の西部にある州の名

ソルト、レーク Salt Lake 同國の北部ユタ州にある湖

枝振はいかにも風趣が乏しいやうに思はれるが、實際はさうでない。

さてアメリカの歌枕を擧げれば、まづワイオミングの平原であらう。眼の屆くかぎり、一物もなく、雪がちらちら降つてゐる中を、たまに羊の群が鐵道線路のあたりをさまよふなどは、優美の觀には缺けてゐるが、一種壯大の趣がある。名にし負ふソルト、レークの鹽の湖を中斷する中央太平洋鐵道の長路を通ると、平原の間に丘陵が起伏して、雪斑の岩角に朝日の反射する景色、こ



ソルトレークを中斷する中央太平洋鐵道

コロラド　米國の西部にある州の名
Colorado
キャニョン　コロラド河の峽谷
Canon
ニューヨーク　米國ニューヨーク州の大都市
New York

れ亦十分に歌枕たるの價値がある。又コロラドの北、所謂キャニョンの一部は、奇岩怪石が路傍に轉つて、さながらの鬼斧神工と思はれる。此の景も歌枕に逸すべからざるものである。

摩天閣

さて此の歌枕といふ詞は、もう少し意味を廣くして見たいと思ふ。即ち山水の風景ばかりに止めず、進んで紅塵萬丈の市街、煤煙の立昇る工場の光景なども詩歌に寫し出して面白いと思ふ。例へば、ニューヨークの摩天閣なども、其の或物は建築美を持つて居ないが、中には一種の新しい趣味の徹底して居

ブルックリン　ニューヨーク市の一部
Brooklyn
ホボーケン　ハドソン河を隔てゝニューヨーク市と相望む都市
Hoboken
マヂソン　ニューヨークのマヂソン公園に接した大通
Madison
バレルオルガン　手風琴
barrel-organ
ウォールストリート　ニューヨーク株式取引所の所在地
Wallstreet

るものがある。ブルックリンの釣橋の上からニューヨークを望むと、建て列ねた大厦高樓が雲に聳えて、殊に薄暮は二十階・三十階の窓の燈が、空の星かときらめいて輝く。又ホボーケンの港口など、朝霞の匂、夕暮の色、他國に無い趣味がある。更に進んで人情・風俗を加へて景色を見ると、愈〻好箇の歌枕がある。

ニューヨークはマヂソンの大通、世界の富を集めた繁華な場所に立つて、イタリーの移民が彈く哀なバレルオルガンの聲を聞くと、聲こそは細けれ、近代文明の弊害を呪ふ切實の音樂かとも聞える。またはウォールストリートの執務時間に其の邊を通ると、黄金の爲に萬人が血眼になつて狂ふ樣な、賭博場を見るよりも猶慘憺たる感を與へる。また、これとは反對に、冬の田舍に入つて見ると、葉の落ち盡した楓樹の並木路を、雪を蹴て小學兒

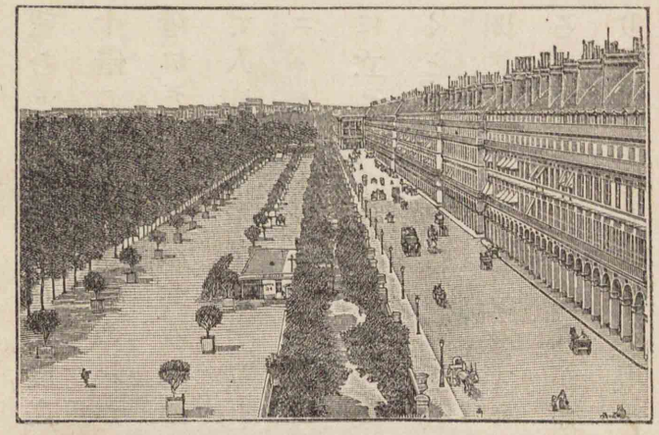
ニューイングランド　米國の東部地方 New England

パリ　フランス國の首府 Paris

シャンゼリゼー Champs Elysses

長安　陝西省西安府　周以後西漢・隋・唐時代までの都

童の走つて行くなど、「若き米國萬歳。」の聲を發したい位である。ニューイングランドの田舍の景色は、落着いて若々しい。如何にも懷かしい感を與へる。



巴里シャンゼリゼー大通

歐米の大都會中、どこが好いといはれたなら、誰も〳〵賞めるのはパリであらう。市街の美觀、道路の整頓は言ふに及ばず、氣候は溫和、風光は佳麗、風俗は優雅、かういふ處に住んで詩でも讀んでゐたいとは誰も望む所かと思ふ。シャンゼリゼーの大通は、實に盛唐の長安もものかは、端麗高雅、世界第一である。

セーヌ　パリ市中を流れる川 Seine

ノートルダム寺　パリにある舊刹 Notre-dame

歌枕はどこにもごろ〳〵してゐる。文明の最高に位するはフランスである、而してパリである。あくまで華美を極めた町の中にも、何處となく超脫した趣がある。車馬絡繹たるセーヌの河岸に、悠然綸を垂れる隱君子もある。橋の下には犬の髮結床がある。河岸の石垣の上にはお馴染の古本屋がある。有名なノートルダム寺の建築はゴシック式の標本で、朝夕の色の變化が著しい。嘗てノートルダムのすべての變化を味はゝうと、一日一晩の間、眺め暮した事もあつた。その最も美觀を極めるのは夕方の景色で、さながら黃金の光を浴びたやう。また夜のしらじらとあけて、朝風の心地よく頰を拂ふ時、之を望むのも好い。眞珠の色を曇らせた樣な色から薔薇色のはでやかなのに至るまでの色合の微かな匂を味はふことが出來る。其の外、花賣る

シャルロット Charlotte
ペルシロン Percheron
ターナー Turner (1775-1851) 英國の風景畫家
テームス R.Thames ロンドン市を西より東に貫流する河
リッチモンド Richmond 英國ヨーク州の古城市
ナポリ Napoli イタリー南部の都會

老媼の風、シャルロットの帽子を被つて、ボールの箱を抱へた店通ひの賣子の姿、ペルシロンといふ牛よりも大きな馬を牽く馬丁の振、夜半近く芝居のはねた後に、雨が降つて幾千の街燈の光が敷石に映る所、自動車が唸り馬車が軋る不夜城の壯觀、滿目の時勢粧、皆歌枕ならぬはない。

ロンドンは佳景の地とは誰も認めないが、その色彩の變化、色合の豐かな點は、ターナーの繪にある通りで、頗る味はふ値がある。併し同じく風光を味はふにしても、住心地よいパリの方が、あらゆる旅客の稱揚する所だと思ふ。たゞロンドンにもテームス上流のリッチモンド邊からの兩岸の風景には、英國特有の美觀が現れて居る。此の他、風車、朱い屋根、清い淀に名あるオランダもよく、イタリーではナポリ邊の夢のやうな景色もよい。スウ

ザルツブルヒ Sulzburg
イギリス海峽 English Channel 英佛兩國の間にある海峽
紅海 Red Sea アラビヤとアフリカとの間にある海

ィスは風光明媚と稱せられる國で、誰も皆嘆賞するが、私は寧ろ南ドイツを採る。南ドイツのザルツブルヒの景は日本によく似てゐる。

要するに、何處の風光が一番勝れてゐるといふ事は、一概に言ひ難い。見る人の心々によつて、如何なる處にも、相當の美は味はれるのである。浪の高いイギリス海峽の船の上でも、暑さの堪へ難い紅海航行の甲板でも、それ〴〵の美は感ぜられる。元來歌枕などと取出してきめるのは、間違つてゐるかも知れぬ。天下皆歌枕ではあるまいか。（心の花）

二八　隅田川の水よ

島崎藤村

流よ、流よ、隅田川の水よ。少年の時分からのお前の舊馴染が復

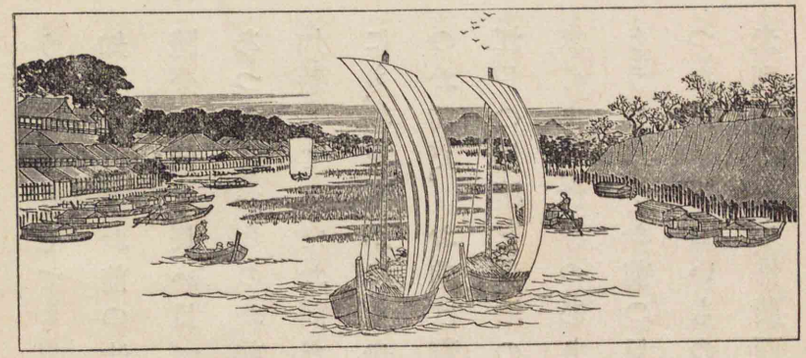
島崎藤村
名は春樹
小説家
詩人
明治五年長野縣
木曾生

旅にある日　大正二年フランスへ行き同五年歸朝
ソーン　東部フランスを流れる川
Saône
ヴィエンヌ　西部フランスにある川
Vienne
ロアール川の上流
ガロンヌ　南部フランスを流れる川
Garonne
アウステルリッツの橋　ナポレオン戰捷記念の橋
Austerlitz
都鳥　武藏國と下總國との中にある隅田川のほとりに至りて……白き鳥の嘴と脚と赤き川のほとりに遊びけり京には見えぬ鳥なりければ皆人見知らず渡守にこれは何鳥ぞと問ひければこれなむ都鳥といひけるを聞きてよめる
名にしおはゞいざこと問はむ都鳥わが思ふ人はありやなしやと
（古今集）

お前の懷（ふところ）へ歸つて來た。旅にある日、ソーン・ヴィエンヌ・ガロンヌなどの河畔に立つて私が思ひ出すのは、何時でもお前のことだつた。巴里のアウステルリッツの橋の畔あたりからセーヌの水を眺めた時にも、私の遠く送る旅情はお前の方にあつた。私はお前の岸に歸つて來て、ふたゝびお前の水を見得ることを喜ぶ。

私が旅に出た時分から見ると、お前は一層默つてしまつたやうな氣もする。お前の聲はどうしたらう。何時までお前はそんなに沈默を續けて居るのだらう。お前の河岸の變遷と工業化とに壓せられて、お前の白魚が死に、お前の都鳥が飛去つたやうに、お前の聲もかれはてたのだらうか。遙かに川上の方から渦卷き流れて來るお前の水が有るかぎり、お前の詩が涸れはてようとはどうしても思はれない。私はお前から溢れて來る詩を知りたい。お前の沈默を破つた聲を聞きたい。

隨分お前も長い目で岸の變遷を眺めて來た。兩岸が武藏野であつた昔からのお前だ。そこに建てられた大きな都の發達を知悉して來たお前だ。舊兩國が一切の交通の中心で、用をたすにも、物を運ぶにも、舟の便利によらなければならない時代からのお前だ。お前は驚くべき大改革を眼のあたりに見て來た。江戸の崩壞を、政治の改變を、憲法の制定を。廣く知識を世界に求めよう、世界のありとあらゆる處から採り得る限のものを採らう、これがお前の見た維新當時に於ける熾盛（さかん）な精神ではなかつたか。新しいものが、かくしてお前の岸へ押寄せて來た。亞米利加からも、佛蘭西からも、英吉利からも、獨逸からも。そして

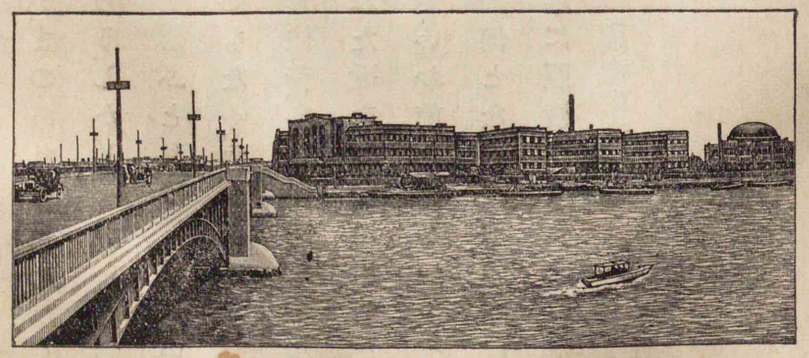


昔の隅田川（安藤廣重畫）

改良に次ぐに改良、破壞に次ぐに破壞を以てした結果、それらの性質を異にしたものが、各自思ひ〳〵の樣式と主張と確執とをもつて雜然紛然たること、恰も植民地の町を見るごとくにお前の兩側に移植された。時代の象徴とも見るべき造形美術、殊に建築を見渡すと、お前の岸にあつたものが餘りに溫和しく、餘りに弱々しく、餘りに纖細で、新しく西洋から入つて來た組織的なものゝ爲に何となく蹂躙されてしまふやうな氣がして、傷ましくてならない。今になつてこの不

クラシック
Classic
古典

調和を歎くのは遲いかも知れない。しかし、われ〳〵日本人が餘りにクラシックを捨過ぎたと氣付くことは決して遲いとは言へない。われ〳〵は廣く知識を世界に求める程の鋭意と同情とに富んで居る。唯われ〳〵はそれを受容れるに當つて、強い判斷力を缺いた。言葉を換へて言へば、歴史的の意志を缺いた。それがわれ〳〵の缺點だ。われ〳〵は自己の支配者では無くなつてしまつてゐた、唯新しいものゝ入つて來るに任せてゐた。お前の岸にある不思議な不統



今の隅田川

一。私はそれをお前に問ひたい。お前がまのあたり見た驚くべき大改革は人の心に「推移」をば齎したらう、しかしながら、人の心の奥に「改革」を齎したらうかと。それを思ふと、私は言ひ難い幻滅の悲哀に打たれる。お前はセーヌでもなく、テームスでもなく、やはり一番親しみの深い隅田川だ。往昔、多感多情な詩人は嘴の紅い都鳥を見て家人の生死を尋ねた歌をお前に遺した。それほど古い歴史のあるお前だが、私は若いお前を夢みつゝそれを頼りにして遠い旅から歸つて來た。何となくお前の水はまだ薄暗い。太陽の光線はまだお前の岸に照渡つてゐないやうな氣がする。お前の日の出が見たい。

（島崎藤村集）

中學國文教科書　卷六　終

文部省檢定濟
昭和五年一月廿一日　中學校國語科教科用

昭和五年一月十日修正十九版印刷
昭和五年一月十三日修正十九版發行

明治三十九年十月十五日印刷
明治三十九年十月十八日發行
明治四十年一月十五日修正再版發行
明治四十三年一月廿八日修正四版發行
明治四十四年十一月十五日修正五版發行
明治四十四年十二月廿六日修正六版發行
明治四十五年十二月廿三日修正七版發行
大正元年十二月廿八日修正八版發行
大正三年十二月廿八日修正九版發行
大正四年一月五日修正十版發行
大正六年十一月三十日修正十一版發行
大正七年十一月廿八日修正十二版發行
大正十一年十一月廿八日修正十三版發行
大正十四年十一月廿八日修正十四版發行
大正十五年十二月廿六日修正十五版發行
昭和四年九月二十日修正十六版發行

定價
卷一、四　金七十二錢
卷三、五　金七十三錢
卷二、六、七、八　金七十錢
卷九、十　金六十七錢

編者　東京市神田區通神保町六番地　吉田彌平
發行者　東京市神田區通神保町六番地　上原才一郎
發行所　東京市神田區通神保町六番地　光風館書店（電話神田三〇八七番）（振替口座東京二二七番）
印刷者　東京市神田區通神保町六番地　山崎與吉

著作權所有

本館發行の教科書は常に多數の製本準備有之候につき萬一各地賣捌所に賣切等にて課業に御差支の節は直接御註文被下候はゞ直に御送附可致候

第三學年

表立不級官　義博

広島大学図書
2000054741